

ホロライブオルタナティブ@upside down

風木守人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある動画に感銘を受けた有志が作成したゲーム「オルタナティブ」をプレイしていたホロライブメンバーは、気が付けば見知らぬ場所にあった。

そこは先ほどまでプレイしていたゲームに似た世界。彼女たちは元の世界に戻る方法を探すため、他の仲間たちと合流するため、この新たな世界を冒険する。

以下、現在小説内に登場しているキャラを登場順に記載(随時更新・敬称略)

天音かなた、大神ミオ、姫森ルーナ、獅白ぼたん、雪花ラミィ、白上フブキ、百鬼あやめ、大空スバル(??↓??)、宝鐘マリン、兔田ぺこら、さくらみこ

更新は土日昼過ぎ頃に不定期の予定です。

目次

プロローグ

1. オンラインゲーム「オルタナティブ」…………… 4
2. 天音かなたと異世界ゴリラ…………… 8
3. 最大のプレイミス…………… 12
4. ルーナイト召喚…………… 16
5. 魔法っぽいスキルが使えるラミイと、…………… 19
6. 世界観とか大前提とかを色々無視する事にしたブチギレししろん。…………… 23
7. 敵に振りかざす拳は、友人に差し出す手のひら…………… 26
8. なんも聞いとらんかったというか、効いとらんかった余…………… 29
9. カモ+アヒル+ハクチョウ+スバルⅡうるせえのら…………… 33
10. 言葉なんてなくても、私たちは分かり合える(目の前に迫る拳)…………… 36
- 40
11. 飛ぶ鳥を落とす勢いってたぶんそういう使い方しねえのら…………… 40
12. 相手のセーブデータごと斬り落としそうな勢いで…………… 44
13. 敵から見たらどう考えても初見殺ししらみ…………… 47
14. 旅の行商人、その名は……… 51
15. 白い奴に限って降り積もった黒歴史は多い…………… 55
16. せめて盗賊団の方が良かったまでである…………… 59
17. チュートリアルには遅すぎる…………… 66
18. そっくりさんが落ちてきた…………… 72
19. テンドンはおいしいって誰かが言ってたにえ…………… 76
20. 天雷、雷音、彼方より…………… 82

2 1.	可愛いアヒルの娘	85
2 2.	わかった（わかってない）	88
2 3.	黒いなあ……	91
2 4.	ルーナイトと眠れない夜（濁点マシマシ）	94
2 5.	四天王だが四人いるとは言っていない	98

プロローグ

落ちる。

「ええっ!!?」

重力の与える速度は、眠っていた少女の顔を叩いた。

風圧を感じるほどにその速度は速く、目が覚めると同時に混乱を呼び込む。

「ちよ、落ちてる！ どこだよココ!!?」

錯乱する少女の背中には小さな羽が生えていた。

腕には黄色の腕章、頭には中央がくり抜かれた手裏剣のような輪っかがきらりと光り、白銀の短髪には底抜けに青いひと房のメッシュが入っている。少し陰のあるような表情と色白な肌は、どこかはかなげな印象を見るものに与えていた。……少なくとも、見た目は。

しかし、彼女は先ほどまで、フアンのみんなに見守られながら動画配信サイトでゲーム配信をしていたはずだった。

それが、どうして。

彼女の名前は天音かなた。キャッチコピーは

「ぎゅっ、ぎゅっ、ってつかむものないじゃん!」

さておき、絶賛命の危機にさらされていた。

恐怖からあふれる涙の隙間から見える視界には、流れ星のように輝く何か、自分と同じように落ちていく様子がチラチラと見えている。

地面は遠く、空が近く感じる。

スカイダイビングに近い状況だった。

「かなたーん!」

驚愕と悲壮感がにじんでいるが、母性すら感じる柔らかな声が聞こえて振り返ると、そこには黒髪に獣耳と尻尾が生えた女の子がいた。

「え、ミオ先輩!」

彼女は大神ミオ。

あなたと同じ事務所に所属する先輩アイドルだ。

「どういう状況なのこれ!」

「知りませんよ！」

「それって、絶体絶命……ってコト!？」

「ミオ先輩意外と余裕ありません!？」

「いやあ、だつてかなたん飛べるでしょ?」

「……あつ」

パニックになり飛べる事を忘れていた天使を、ミオはジト目で見つめた。

「……まあ、最悪ウチは狼の身体能力で着地するから平気だよ！」

「ミオ先輩筋力と見た目のバランス狂つてません?」

「かなたんは自分の握力自覚しようね?」

「あ、ハイ……」

かなたのキャッチコピーは「握力50kg、ぎゅつ、ぎゅつ、握りつぶしちゃうぞ☆」である。ちなみに、本当に握力が50kg近くある。

良くものを握り潰すので、すごくやさぐれた顔で「この世は脆すぎる」と語ったこともあったが、本人は特に気にしていない。むしろ誇りを感じているほどだ。

先日、握力52kgという新記録を打ち立てた時には、むしろご機嫌だった。

「可愛い潰せる! とか新しいキャッチコピーとしてどうですかね?」

「……ウチのこと握りつぶす気なのかな?」

非常識な状況でも楽しそうに話す二人であったが、突然、ミオに異常が起きた。

なぜか、かなたから離れるように不自然に斜めに落ち始めたのだ。

「あれえ!?! なんかに引つ張られるよ!?!」

「先輩!」

「なんだこれ……みおおおーん!!!」

手を伸ばし合うかなたとミオだったが、離れる速度があまりに早く、数秒後にはミオは既に表情が分からないほどに離れて行ってしまっていた。

そして、その姿が遠のき、小さく、小さく、それこそ流れ星のようになつた時にかあなたは気が付いた。

「これ、落ちてるのもしかしてみんなホロライブのメンバーなの？」
ふわり、とあなたは未知の大地に足を下ろす。

そして、

「いたたた……」

その横に同じように、頭からピンク色の何かが墜落していた。

「痛えのらく」

1. オンラインゲーム【オルタナティブ】

オンラインゲーム【オルタナティブ】。

アイドル事務所にして動画配信を主な事業にしている「ホロライブ」が作成したとある動画が反響を呼び、有志によって製作されたオンラインゲーム（オンライン要素は未実装・実装未定）であり、そのテストプレイ動画のクオリティが異常に高かったため、ホロライブメンバーの中でも一時期話題に上がっていた。

そして、その製作者がどうやらホロライブの熱心なファンであったようで、正式リリースの数日前に、ゲームのデータが事務所へと送られてきた。

その際、メッセージには、

「拙作、【オルタナティブ】は貴社のアイドルに感銘を受けた有志によって作成された作品です。彼女たちに敬意を表し、正式リリース前に献上いたします。お楽しみいただければ幸いです。」

それでは、貴社と所属アイドル方々の今後のより一層のご発展を心より祈念申し上げます。結びとさせていただきます。

有志団体 K」

と書かれており、簡単に言うと「ホロライブのファンが作ったゲームだから正式な配布前にあげるね。これからも活動を応援してます。ファンより」といった内容だった。

そのため、メンバーたちの間で正式リリース前でも許可が取れ、プレイ動画を上げようという流れになり、賛同した者たちで同時にライブ配信を行ったのだ。

天音かなたや、大神ミオもそうであるし他のホロライブメンバーもこのゲームのプレイ動画をライブ配信しようとしていた。

「ラミィ、どんなポジションなんだろう！ ししろんやろうよお！」

「ちよ、FPS（主に銃を打ち合うタイプのゲーム）以外は自信ないし！」

雪の国の令嬢とつよつよライオンはそんな事を話し、

「スバルには、ファンタジー要素ねえからなあ」

「船長はちゃんと船に乗ってるよね、君たち？」

愚痴るアヒルと恐る恐るといった様子の子の海賊船船長は顔を見合わせ、

「ファンタジー世界でもみこはえりーとなんだにえ！」

「ふあふあふあ……あんなたち、日よつてんじやねえぺこよ！」

LucK値にいささかの不安を感じる巫女と兎が煽り合い、

「これは刀が使えるタイプの白上だね」「……みたいだなあオイ」

「……そうのようだなフブキ先輩（Y A B E）！ 余、何も聞いとらんかった……」

白黒狐と二刀の鬼が意思疎通を誤った。

その他にも、ホロライブメンバーを刺激する要素が満載で、皆が楽しみにしていた。

さて、このゲームの名は「オルタナティブ」。

日本語に直すと代替品だ。

それは、公式に比べれば見戯に等しいくだらないお遊びという謙遜なのか。

それとも――

――お前の代わり等、いくらでもいるという意味なのか。

§

「天音ちやありがとうなのら〜」

「気にしなくていいよルーナ。それより、僕たちどこに来たんだろ。

【オルタナティブ】のゲーム配信をしていたはずだったんだけど」

「分からないのら〜。ルーナもゲームを起動したあたりで記憶が飛んで、気づいたら落ちてたのら〜」

コメディ漫画のように頭から地面に突っ込んだ少女を何とか引っぱり出したあなたは、相手が自分の友人であることをようやく確認した。

ピンク色の長髪に、同色を基調としたドレスを身にまとった彼女は

姫森ルーナ。天音かなたと同期のアイドルで、お菓子の国から来たお姫様だ。実際、彼女の愛くるしい表情や独特な口調から、事務所の皆にお姫様のように愛されている。

いわゆるオツドアイで、夜明けの空のような薄明るい紫色と、春に芽吹いた若葉のような淡い緑色の双眸は、現在、考え事をしているためかやや上を向いている。

「ここはゲームの中なのら〜？ でも、お菓子の国に帰る時みたいなの、ぎゅーんってした感じもしたのら〜」

「さすがに今の技術でここまでリアルなゲームはないと思うんだけど……お菓子の国に僕ごと転移したとか？」

「それにしても、お菓子がねえのら！ 爺やがいねえのら！」

「ああ、確かに」

見渡す限り、草、木、花、ゴリラ、岩、空、雲。

「……」

「……」

……視線を戻そう。

雲、空、岩、ゴリラ、花、木、草。

「……」

「……」

二度見するルーナとかなた。

「天音ちやの本体なのら？」

「ちやうわ!!」

「確かに、あのゴリラは頭に手裏剣ねえな」

「確かにあつたら僕に見えるけども！」

びしっと突っ込むかなた。

ちなみに、かなたはテンションが上がり目で突っ込む時、何故か関西弁になる。

しかし、その鋭い動きが目を引いたのか、巨大なゴリラのような何かが胸元を叩きながら咆哮を上げた。

「ゴアアアアアアアアアアアアア!!」

漆黒のゴツゴツとした肌を青白い毛皮が覆っている。声を聴くだ

けで、それがおおよそ人間の倒せる相手ではないことが分かった。ト
ラックを素手で止められないように、いくら握力が強い天使でも、勝
てない。

「あちやあ……僕以上に握力がありそう。負けた」

「そういう問題じゃねえのら!!」

少なくとも、ボケとツツコミが逆転する程度には二人とも困惑して
いたようだ。

2. 天音かなたと異世界ゴリラ

「落ち着くのらー！」

ゴリラを前にした姫森ルーナは、毅然とした表情を浮かべながら天音かなたの後ろに隠れた。

「こいつは同族なのらー！」

「違うからね!!」

まるでかなたを盾にしているようなその仕草を見て、かなたはため息をついた。

それは、ルーナに失望したからでは、もちろんない。

(天音ちゃ、逃げるのらー！ 天音ちゃ一人なら、空を飛んで逃げられるのらー！)

と、ルーナが自身を見捨てて逃げる理由を作っていると、理解できなから。

「ふっざけんな！ 頼れっつーんだよルーナ！」

「!!？」

「僕やみんながルーナを大切にするのは、ルーナがお姫様だからじゃない！」

そして、天使は同期の姫を裏切らない。

「ルーナが大切にしたいって思える存在だからだ!!」

ふんすつ、と音が聞こえそうなほどに鼻から息を吐き出し、異世界のゴリラに向き直る。

もしこの世界がゲームだとしたら、それはモンスターののような存在なのだろう。

例えば、背が3m近くあり、放電しているのか時折バチバチと音を立て、ドラミングする両腕があなたの胴体ほどあったとしても、ゲームならチュートリアルのはずである。

なら、楽勝だ。

(つて言いたいけどね)

しかし、一つだけ正解だったのは、この世界がゲームなのではないかという考え方だ。

「えっ、メニユー画面がひらけたのらよ!」

「ええー!!?」

ルーナの事件性のある悲鳴に近い声を聴いて、天音あなたはメニユー画面なるものを開くことができた。

空中に青白い画面のようなものが開く。ARのように、目の前に現れたそれには、「スキル」「アイテム」「仲間」の三つの項目が表示されていた。

「【スキル】?」

【スキル】の項目を開くと、パッシブスキルとアクティブスキルの二つが表示された。

【パッシブスキル：天使】

「元からやつ!!」

「あまねちや!?!」

「〃翼を与える〃 つて、もう付いてんねん!!」

「ど、どうしたのら!?!」

キレのあるツツコミを披露する天使だったが、それどころではないとルーナの声で気が付いたようで、アクティブスキルの記述を目で追った。

ちなみに、一般にパッシブスキルとは常時発動するスキルで、アクティブスキルとは所有する者が使うことで初めて効果が適用されるスキルだ。

【アクティブスキル：掌握】

「……まさかね。僕、すごく嫌な予感がするんだけど」

何かを察したかなたは、偶然足元に落ちていた石を拾い上げると、アクティブスキルを発動させるイメージで、試しに握ってみた。

「フンッ!」

その瞬間、握り締めた石がはじけ飛んで砂になった。

「……ねえ、酷くない?」

かなたが手のひらを開くと、かつて石だった砂がさらさらと零れ落

ちて行った。その様は、大切な何かの手ひらから零れ落ちていく様子を目の当たりにするかのようだ。

「すげえのらー！ これならあのゴリラにも勝てるのらー！ 握力で」
「うん、そうだねー！ そうだけどね!!」

もろ手を挙げて称賛するルーナと、対照的に微妙に引いた表情のあなたに、滑稽な様相を呈する中、ゴリラはあなたの動きを挑発と受け取ったのか、野球ボール大の石を持ち上げて投げつけてきた。

あなたは思わず右手をかざし、スキルで握りつぶした。

「ゴリラがノーバンで投げてきた石を握り潰したのら?」

「現実を直視したくないから正確に解説するのやめてくれない!」

わちやわちやと暢気な会話を交わしながら、あなたは天使の翼をいためかせ、飛翔する。飛び道具がある以上、足を止めるのは悪手だと理解したためだ。また、ゲームの経験から、地面を移動する 2D 的な移動より、空を飛ぶ 3D めいた飛翔の方が的を絞りにくいことを彼女は知っていた。

「あまねちゃんのあれはスキルなのら? なら……」

姫森ルーナというアイドルの魅力の一つは、その非常識な言動や口癖、振る舞いに反して非常に常識的であり知識に富む——ある種のギャップだ。お姫様のように振舞うのに、料理やプログラミング言語に造詣が深い節があったりするのも、一部に変な笑いを誘う。

それはさておき、彼女は現在の状況を的確に認識しており、スキルというものをひとまず発動させてみることにした。

「【ルーナイト召喚】!」

§

同時刻。

「ラミィ……?」

灰色の長髪に獣耳、いつもは眠たげなダークグレーの瞳を鋭く光らせた長身の女性が雪原に立っていた。白く光る八重歯のような二本の牙は、彼女の獣性を示しているが、表情や仕草には深い知性を感じ

させる不思議な魅力がある。

周囲には乱雑にライフルやハンドガン等、恐るべき兵器がおびただしい数、打ち捨てられていた。

降り注ぐ白い雪が、黒鉄の銃身を塗りつぶしていく。

彼女の目の前に、青い髪の女性が倒れている。

明るい青い長髪に色白な肌は彼女が高貴な令嬢であることをうかがわせる。特徴的な頭頂部のクセ毛——いわゆるアホ毛はハート形にカールしており、青と白の花びらの花をモチーフにした髪飾りをつけていた。

明るく優しく、いつも笑顔を振りまいていた、長身の女性が大好きなアイドルだ。

「ねえ、起きてよ……お願いだから……」

3. 最大のプレイミス

時刻はさかのぼる。

獅白ぼたんが「オルタナティブ」に入った刹那に行ったことは、全力で思考し試行を続けることだった。

(……多分異世界って奴か。で、スキル持ってて、こんな感じに使えると)

パンっ、と意外に軽い音が響く。

【アクティブスキル：銃器作成】

(あと、パッシブスキルの目は……微妙)

獅白ぼたんはかなた達同様に、いや、それ以上に早く自分の置かれた状況と与えられた能力を把握しつつあった。そしてそれは、彼女自身の思考の速さと、この世界で得たスキルのためでもある。

【パッシブスキル：明鏡止水の眼】

【アクティブスキル：銃器作成。望んだ銃器を生成可能。大まかなジャンルを指定し、生成すると召喚される。召喚した本人以外使用不可、残弾がなくなると自動消失(設定変更可能)。精製した銃器は「アイテム」に保存できるが、重さは反映される。アイテムに保存した銃器は、外的要因による劣化を生じず、即座に使用できる。

追加効果：近未来兵器開放、空想兵器開放、反動軽減、自動装填(パッシブスキルはスキルとかを見抜く目。あと、多分、色んな意味で視力が良くなるんだろなあ、普通なら。アクティブスキルは使つてたらなんか追加効果出たから、成長するのもかも)

銃器を繰り返し作成し、【アイテム】に保存しては火力や射程距離、装弾数、動作確認を続けるライオン。その過程で襲い掛かってきたゴリラやら何やらを射殺したのは彼女にとって些細な事だ。

(ラミイと一緒にプレイを始めたんだ。このゲーム。つまり、ラミイもここに……)

周囲は凹凸の激しい草原のような場所だ。ただし、一定の傾斜があるので、おそらく雨期に削り取られた低く緩やかな山脈のすそ野だろうと、彼女は検討づけていたし、それは正しかった。

少し歩いていくと、遠くに村と思われる建物群と、少しだけ踏み固められた道のようなものが見え始めたのだ。

(他のホロライブメンバーも無事できるといいけど……ふふっ)

心配するなんて野暮か、と獅白ぼたんは苦笑する。先輩、同期、後輩に至るまで、そう簡単に困難が立ちほだかつたところで挫折する者たちではないと、信頼しているから。そしてむしろ、皆で力を合わせればどんな不可能だって乗り越えられると知っているから。

と、心が幾ばくか軽くなつた彼女の目の前に、ロープをまとつた人物が、道の端にある岩に腰かけて休憩している様子が見えた。その横には魔法使いが使うような木の杖が立てかけられていて、身長や体格から、男性である事だけが何となくわかる。

(この世界で銃の位置づけが分からないからしまつてく。ナイフだけ腰につけておこう。何も武器を持っていない方が、今までの状況からして、不自然だ)

何せ変なモンスターに襲われて撃退してきたのだから。

「ららーいおん！」

「……？」

「……こんにちは」

「あ、ああこんにちは」

つい慣れた挨拶をして首をかしげられたぼたんだったが、即座に普通の挨拶に切り替える。彼女なりに気が張っていたのだろうが、ひとまず言葉が通じることを確認して、その豊かな胸をなでおろしたのは仕方のない事だろう。

「少し道に迷って困ってたんだけど、ここはどのあたり？」

「ここはアスコットという山の中だ。まさか、イーサナメイ側から登って、道に迷った挙句、アマティアスまで山を越えて旅してきたのか？」

「ははは、そんなところみたい！」

「大層、腕が立つのだな」

当たり前障りのない回答をしながら、地理を頭に入れていくつよつよライオン。

どうやら、今いる地域はアマテイアスという地域であるらしい。ロープをかぶっていて表情はよく見えないが、男の声音からやや呆れているようだから、このアスコットは危険な山なのだろう。

「ところで、アンタ『鬼ごっこ』は知っているか？」
「……………」

突拍子もないロープ男の質問が聞き取りづらかったふりをして、ぼたんは時間を稼いだ。

言葉がわかってても、文化が違う可能性を考慮したためだ。

幸い知っている遊びだが、『鬼ごっこ』というのが日本という『相撲』のような国技であった場合、細かい差異がある可能性もあるし、知らないふりをした場合一気に疑われる可能性もある。少なくとも、ロープ男は今までのぼたんとの会話で、彼女一人でこの山を越えてきたという事実を多少疑っている節があった。

これ以上の疑念を彼に抱かせるのはまずいと、ぼたんは即座に判断していた。

しかしここで、あえて獅白ぼたんのミスを指摘するならば、その思慮深さから自分が疑われる可能性を考慮した結果、相手が疑わしい対象だという可能性を考慮する事を少しだけ軽んじてしまった事か。

「『鬼ごっこ』だよ」

「ああ、確か、こつちだとルール違うんだっけ」

「お、地域ごとのルールを気にするタイプか。結構ガチでやってた？」

「えー、秘密う……………くすくす」

「強そうだなアンタ」

持ち前のコミュ力で当たり障りのないやり取りを続けるぼたんに、ロープ男は得意げにルールを話してくれた。

「いいか、俺の知ってるルールだと、鬼が相手の額に手が触れれば勝ち、触れられれば負けだ。そして、鬼に負けた者は勝った鬼の奴隷になる」

「ほうほう……………」

「例えばこんな風に……………」

冗談っぽく、ぼたんの額に手を触れようとしたロープ男の手を、彼

女はスキルが発動した瞳を見た。

【支配「鬼ごっこ」：ルールを説明した相手の額に触れると発動し、相手を支配する】

「!!?」

とつさに背後に跳んだぼたんはローブ男は舌打ちをして嫌悪の声を上げた。

「ちっ、なぜバレた!?!」

「だっってお兄さん、ローブで顔隠してて怪しいんだもん」

当たり障りなく返すぼたんであったが、ローブ男の次の一手は、最大のプレイミスだったと言える。

「そうか、なら、既に駒にしたお前の仲間に合わせてやろう」

急に、周囲の気温が下がったのをぼたんは肌で感じ取った。

実際、周囲に雪がちらつき始め、まだ青い葉を茂らせる木々草花に降り積もっていくという異常事態を目の当たりにして、ようやくそれが雪の令嬢の持つ能力だと知った。

「ししろん!?!」

「ラミイ!?!」

ローブの男の後ろから、青い髪を揺らしてやってきたのは、獅白ぼたんが愛する同期のアイドル、雪花ラミイだった。

その額には、禍々しい紋章が輝いていた。

「さあ、鬼ごっこを続けようか」

4. ルーナナイト召喚

「ルーナイト召喚！」

紫と緑のオツドアイに決意を宿し、ピンクを基調としたドレスをはためかせたルーナがそう叫ぶと、地面に不思議な魔法陣が走り、光り輝いた。

思わず目を閉じた彼女が目を開いた時には、目の前に甲冑の騎士が片膝を折り、かすずいていた。

「んなあっ!?!」

かなたが立ち向かっているゴリラのようなモンスターかと警戒して、ルーナは悲鳴を上げたが、その様子を見た甲冑はおろおろと両手と首を振りながら、土下座をし始めた。ガン、ガン、と重い金属鎧の頭を、繰り返して地面に打ち付ける音が響く。

その様子はまるで、言葉を発せないのにしきりに敵意がないことを示そうとしているようだった。

「え、えっと、ルーナイトなのら?」

ルーナに声をかけられた甲冑は、ビクツと反応し、俊敏に両膝と手を地面につけながらコクコクとうなずいた。

その様子は申し訳なさそうでありながら、声をかけられてどこか嬉しそうでもあった。

「敵じゃねえのら?」

そう問われた甲冑は自分の腰元を見降ろした。

そして腰に帯びた巨大な剣を見つけると鞆から引き抜くや、己の首の装甲の隙間に差し入れながら、次のルーナの言葉を待った。

そこはかとなく、悲しい覚悟を決めた哀愁が漂っていた。

「んなああ!?!」

ルーナに疑われ、怖がられ——そして何より彼女が望むというなら、無条件で自害すらいとわぬ覚悟であることは、明らかだ。

見上げた忠誠心である。

ルーナは慌てて呼び出した本来の理由を話した。

「今、あまねちやが戦ってるアレと戦ってほしいから喚んだのらけど

……」

ルーナイトは振り返って状況を把握したようで、立ち上がるとルーナに背中を見せる。

「あ、待つのならよ」

ルーナの命令に従って、甲冑の手足が歩みを止める。

そして、天命を受けとった。

「ルーナイトとして、忠誠を尽くしてくれるのは嬉しいのらけど、死ぬんじゃねえのならよ！ ルーナ、君が傷ついたら泣くのならよ！ 悲しいのらよ！ 強くても、負けそうなら逃げていいのら！ 絶対に、自分を犠牲にするんじゃねえのなら！」

「!!?」

甲冑はほんの一秒ほど、カタカタカタカタと、不自然な震える音を響かせてから、かなたが戦うゴリラの方へ走る前に、重く重く、うなずいた。

ルーナイトの身長は遥かにかなたより高いが、それでも異世界のゴリラの身体は異常に頑健であった。

だが、悲鳴を上げたのはゴリラの方だった。

「ぐああああああ!!」

ルーナを愛するルーナイトという存在は、ゲーム上ではあるが自身の身体より数倍大きな怪物に立ち向かい姫を守り切った実績すらある。そして、それを成してなお、名乗りもせずに去っていく真正の騎士であった。

それが、姫直々の勅命——それも自身が傷つけば姫が悲しむという——を受けて奮い立たずに何が騎士か。今、彼の士気は空より高く、もとより、忠誠は海より深い。

そして、ルーナイトの戦闘能力は、もし現実世界に全員が顕現すれば姫の一言で世界征服すらできるのでは、と言われるほどに高かった。

そんな騎士の一人である甲冑はゴリラに大剣で追撃を加えると、空を舞うかなたに頭部を向ける。

「ないすう！」

意をくんだかなたは、一気に加速してゴリラの頭部に両手を向けた。

岩を砕く握力に野生の勘が危機を伝えたのか、ゴリラは初めて魔法のような能力を行使した。

それは一つの方向に向けた放電に近い。

対象は、かなただ。

「ぐあああ!？」

だが、その一撃を甲冑は許さない。

自身の大剣を振るい射角を狂わせた。明後日の方向に走る青白い雷に冷や汗を流すかなただだったが、頭部はから空きだった。

そして、天音かなたが両の手をゴリラの頭部にかざす。

「ぎゅっ、ぎゅううううー!」

ぐちゃ、とトマトがつぶれるような音がした。

5. 魔法っぽいスキルが使えるラミイと、

タタタタツ、タタタツ、と意外と軽い発砲音が立て続けに響く。それに相対する雪の令嬢は、非常に困った表情を浮かべているが、彼女に弾丸が到達することはなかった。

「チツ、詰まった!!?」

獅白ぼたんは思わず声に出すほどにいら立ちを隠せずにいる。

銃器は極端な気温や砂塵等に弱い。

精密機器であるため、機構を構成する金属が気温の影響で伸長したりするとかみ合わなくなるし、その隙間に砂塵や雪なんかが入り込むと、それ以上に最悪だ。

特に、極低温下では潤滑油となる油すら固まって用をなさない。

過去、マイナス数十度の戦場で、とある軍隊が数十倍どころか、数百倍と言われる兵力を跳ね返した実績すら、世界の歴史でまことしやかにささやかれるほどである。

環境が銃器を殺し、環境が寡兵を活かすのだ。

「ラミイ、一応聞くけどそれ何?!」

「わかんないのお〜!」

どうやら、ローブ男に操られているらしいラミイは、自分がどういうスキルを発動してぼたんとか戦っているか理解していないらしい。

(いや、効果はわかってるんだけどねえ)

【パッシブスキル：雪の令嬢。周囲(0m〜1km。効果半径によって減衰あり)を冷やし、雪を降らせる。ラミイの意思によって、成長の果てには晴天を覆い、雪空に変えることすらできるが、現在はそこまでの威力はない。使用者の体には影響が小さいが、長時間使い続けると低体温症になる恐れがある。】

【アクティブスキル：大中招福。一定の積雪がある範囲内で味方となるシロクマっぽいものを召喚する。基本的に自律行動する。強さは召喚に消費した積雪と気温が影響する】

ぼたんは動かなくなつた銃器をすぐに捨てると、ハンドガンを【アイテム】から取り出して足元の雪玉のようなものを撃つ。

丸っこい熊耳が付いたそれは、おそらく、小型化したダイフク——
ラミイのお供のシロクマだ。ラミイのアクティブスキルは雪を消費
して自立行動する味方ユニットを生み出すことだと、ぼたんは理解し
ていた。

(それより、問題はパッシブスキルの方)

もう片手でスキルによって反動軽減をしながら、アサルトライフル
をフルオートにして、銃弾をばらまく。しかし、ラミイの周囲に舞う、
半径10m程の不自然なまでの吹雪に到達するや、全ての弾丸が凍り
付いたツララのようなものにまとわりつかれて止まり、あるいは明後
日の方向に跳んで行く。

「アニメで見たことあるんだけどそれ！ オートガードなの？ 拾壺
之型？ 氷属性かと思ったら水属性かラミイ!？」

「違うの！ ラミイが大好きなのはむしろ奇妙な冒険の方なの!! そ
れに氷柱だとしたら、よくよく見たら字面がツララだよ!!」

「ははっ、ツッコミが追い付かねえ!!」

もちろん、ラミイには当たらないように両手でフルオート射撃を繰
り返すぼたんだったが、そのことごとくが氷のガードに弾かれる。

「こう、都合よくラミイを無力化できるやつないの?」

「スタングレネード投げたら凍って作動しなかったんだけど!？」

「そ、そうだ！ リスナーさんが言っただけど、冷凍庫でもウイスキー
は凍らないって」

「はっ……って、そんな情報が解決の糸口になるわけないし!？」

軽口をたたき合いながら一定の距離を保ち銃弾を撃ち、時折現れる
ダイフクの奇襲を抑え込むぼたんだったが、正直じり貧であった。何
故なら、少しずつだが風雪によって視界が悪くなり、手足が凍え、地
面がぬかるんでいくからだ。

(多分、^ゴ鬼ごっこなら鬼は一人のはず。鬼を倒せばラミイは元
に戻る。だから、奥の手を使うのはその時まで……)

「ししろん！ よけてえ!!」

風雪の間から、熊耳の巨軀が見えた。

「くっ!？」

ぼたんはとっさに手にしていたアサルトライフルでガードしたが、本物のクマに近い大きさのダイフクの一撃を受けて、数メートルは突き飛ばされた。

(積雪が増えるほど、ダイフクが強くなるのか。見誤った……な……) ひしやげたアサルトライフルを投げ捨てたぼたんは、もう一度同じ銃器を取りだして杖代わりにする。

軽い脳震盪のようだ。

「ふふふ、俺の支配下に下る時が来たようだな」

「何を」

ぷつ、とアイドルとしてははしたない音を出して口腔ににじんだ鉄の味を吐き出したぼたんは、時間を稼ぐために言葉を紡ぐ。

いや、脳震盪を直すためのように装って、ローブ男から情報を引き出すことにした。

「お前は、いや、お前たちの目的はなんだ？」

「はん、俺もお前と同じでここに呼ばれた口さ。そして、お前たちを支配して従えるように指示されたもんでね」

ローブ男の勝ち誇ったような声音を耳にしながら、

(はい、ビンゴ)

敵がローブ男だけでないこと、目の前の存在がおそらく自分と同じ異世界の存在であること、そして黒幕がいること。

情報の収集が完了したところで、ぼたんはラミイを解放するために最後の抵抗を試みようとした。

「動くな……ようやく支配が終わったようだな」

「!？」

その言葉だけだったら、ぼたんは既にローブ男を攻撃していただろう。

その動作が仮にでも止まったのは、ラミイの瞳から意思の光が消え、その手に持った鋭いツララが、彼女の喉に向けられていたからだ。

「お前が動けば、この女は自害する」

「……」

ぼたんは、概ね脳震盪の影響がなくなったのを自覚すると、杖代わ

りにしていた銃器を捨てて、両手を上げた。

「いい答えだ。さて……」

ラミイが降らせた雪をふみにじりながら、ローブ男はぼたんにも歩み寄る。その顔には分かりやすいまでに嗜虐心がにじんだ、へらへらと下卑た笑みを浮かべていた。

「ところで、最後に聞きたいんだけど、今のラミイって意識ない感じ？」

「うん？ まあそうだが」

「そっか……丁度いいや」

「ん？ まあ気にするな。お前もこの後そうなるのだからな」

ぼたんが僅かに手を動かそうとすると、ラミイが呼応するように動いた。

「ラミイ!!」

ツララがラミイの白い首筋に触れる。

男は舌打ちをした後、ぼたんから距離をとってラミイの後ろまでさがった。おそらく、銃弾を警戒しているのだろう。

「動くなど言ったはずだ。そうだな、武器を捨てろ、全てだ。」

6. 世界観とか大前提とかを色々無視する事にした ブチギレししろん。

獅白ぼたんはローブ男の要求に従って、「アイテム」に収納した武器を捨てる事にした。

「マジで全部?」

「そうだ! この女の命がおしかつたらな!」

「……」

ぼたんの周囲に銃器や兵器が吐き出されていった。

ハンドガン、手りゆう弾、コンバットナイフ、アサルトライフル、スナイパーライフル、サブマシンガン、アンチマテリアルライフル……、「ははは、このあたりが切り札だったのかな?」

クレイモア地雷、グレネード、テイザーガン、スペツナズナイフ、対戦車地雷、パンツァーフアウスト……、

「お、おい?」

アハトアハト、「自主規制」、「近未来兵器」、「corrected」
……。

「……ちよつと待て」

「うーん?」

アクティブスキル銃器精製で【アイテム】に突っ込んだものを出し切ったぼたんは、手足のストレッチをしながらのんびりとローブ男に笑顔を向けた。

「お前……なんだこれは」

「うん? スキルで作った兵器を全部捨てたんだけど?」

一仕事したわー、と言いたげな様子の獅白ぼたんに、若干引いた表情のローブ男だったが、人質がいることを思い出したのかその表情に動揺が走ったのはわずかな時間だった。

そのはずだった。

「いやー、でもこのスキルって使いにくいね」

「!!?」

刹那、獅白ぼたんの声が背後から聞こえた。

男の視界から彼女が消えたのとほぼ同時の事である。

「スキルで生み出した兵器の重さは、「アイテム」に入っている、どうやら私自身に反映されるっぽいんだよねー」

「な、なんっ……」

雪原に無造作に転がる黒鉄の兵器。冷たい砲塔や銃身、爆発や閃光などによる殺傷能力を秘めたそれらの数は、おそらく百を超えている。

一体、何トンの負荷が彼女にかかっていたというのか。

「君の勘違いはたったの一つだよ」

ローブ男は振り返ったはずなのに、既に獅白ぼたんはそこに居なかった。

既に視界から消えている。

「私はスキルを使った方が……多分、弱い」

「!?!」

ローブ男の視界が反転した。

殴られたのだと気が付く前に、雪が降り積もった地面に茶色い線を描きながら転がされていた。

「そして、敗因はたった一つ」

百獣の王たる獅子に鬼ごっこを挑んだ愚を、ローブ男はその時ようやく思い知る。

「てめーはラミイを傷つけた」

§

「ねえ、ししろん！ いい加減機嫌直してよお……」

「ぐすっ……別に怒ってないし」

何故か不思議と目が赤い事を努めて無視しながら、ラミイは早歩きするぼたんの横に並んだ。額に浮かんでいた禍々しい紋章は既に消えており、彼女らしい快活な笑顔は幾ばくか、ぼたんの陰鬱とした気分を払拭した。

「ちよつと、ラミイの雪が目と鼻に入ったただけだから」

「途中から覚えてないけど、ししろんかつこよかつたよー」

実はぼたん、ローブ男を再起不能にした後、秒でラミイの上半身を抱きかかえたのだが、全く反応しない彼女に最悪の事態を想像し、大泣きしてしまったのだ。

しかも、その声で起きたラミイにばつちりその泣き顔を見られてしまっており……。

つまり、とても恥ずかしかったのだ。

「ッねえ、起きてよ……お願いだから……」

「ぐふっ」

ラミイ渾身の獅白ぼたんの声マネ。

ししろんのライフはもうゼロだ！

「ッなんでも、なんでもいう事聞くから、ねえ！」

「それは言っていない！」

「ええー」

「ええー、じゃない！」

等々と、ラミイと軽口を交わし合って落ち着いたぼたんは、そういうえぼとラミイにこの世界に来た時の事を尋ねる。

「ラミイも空から落ちてきた感じ？」

「うん、途中でルーナ先輩が「んなああああ!!」って言いながら遠くに落ちてったよ」

「そっかー」

「ししろんは？」

「うん、私は……」

この世界に来た時の事を回想したぼたんは、ローブ男に仲間がいることに戦慄する。

そして、ッ鬼ッごっこという言葉から、この世界で初めに顔を合わせた先輩の実力を思い起こし、冷や汗と苦笑いを浮かべた。

(あ、やっべ。あの先輩が敵に回ったら勝てないかも……)

7. 敵に振りかざす拳は、友人に差し出す手のひら

「ふう……」

異世界ゴリラを握りつぶしたかなたは、力が抜けてしまったのか着地と同時に膝から地面に崩れ落ちる。倒したゴリラはゲームらしく、光の粒子となって消えていった。

しかし、その頭部を握りつぶした感触は本物だった。かなたは手を開いたり閉じたりしながら、落ち込んでいた。

（これじゃ、フアンの人と握手できない……）

グーパー、グーパー、と手を動かすかなたは、大きな挫折を味わったことがある。

アイドルを目指した彼女は、耳が聞こえにくくなって、夢を諦めかけたことがあった。だからこそ、アイドルとして当然行う握手という行為が常識外の攻撃になっていることに衝撃を受けたのだ。

（どうしよう、どうしよう……どうしよう……フアンのみんなの手を握れないなんて、僕は結局アイドルに――）

ぱし、と小さな音がした。

「あまねちや、すごかったのら!!」

姫森ルーナが、天音かなたの手を握った音だった。

それも何の恐怖もなしに、むしろ満面の笑みとともに。

「あんなに大きな相手を倒すなんてすげえのら！ ルーナ見てて感動したのら！」

「……」

ぴよんぴよんと飛び跳ねるように、かなたの手を握りながら上下に振るルーナに振り回されてようやく状況を理解した。

「ふふっ」

「？」

なんなんらしく、と言いたげに首をかしげるルーナを前にして、かなたは自身の苦悩が杞憂だったことを悟った。

「いや、ルーナはやっぱりお姫様だと思っただけだよ？」

「それ、絶対馬鹿にしてるのら!!」

不機嫌そうなルーナに、話題をそらそうとしたかなたは視界の端にまだ甲冑がいることに気が付いた。

「ルーナ、助けてくれた甲冑がいじけてるけどいいの？」

「ええ、どうしたのら？」

よく見るといじけているというより、ひざまずいて次の指示を待っているようにも見えた。実際、召喚した時と同じポーズをしているので、待機状態のようなものなのだろう。

「ルーナイトのおかげで助かったのら。また困ったら頼むのらよー！」

コクコク、とうなずいたルーナイトは召喚された時と同じように光り輝いた魔法陣に吸い込まれて帰っていった。

全く、不思議なスキルである。

「あれ、ルーナイトなんだ……」

「多分そうなのら」

ルーナがサムズアップを決めると、あたかも溶鉱炉に沈むアイルビーバツク感を出しながら魔法陣に沈んでいくルーナイト。

少なくとも、ノリは良いらしかった。

「ふう、とりあえず聞きたいんだけど、ココどこなのかな？」

「分からないのらけど、こういう場合、とりあえず町まで行ってみた方がいいと思うのら。野宿の用意どころか、飲み水一つ持ってねえのら」

「確かに」

かなたとルーナは数分間話し合ったうえで、方針を決めた。

「じゃ、行ってくるー！」

「頼んだのらー！」

かなたはその、小さな両翼をはためかせて真上へと、軽く螺旋を描きながら飛翔した。

ひらひらと小さな手を振るルーナの隣には、甲冑の騎士がひかえていた。再びスキルで召還したルーナイトである。

周囲の別のモンスター(?)を引き寄せてしまう事を考慮してあらかじめ召還したのだ。

(うーん、天界を飛んでる感じじゃないな。冷静に考えると、地上と同じで重力や風圧に引つ張られて飛ぶ感じだ)

あなたはしばらく上昇を続けながら、この世界の空が現実世界とほぼ同じであることを感じ取っていた。

飛翔を続けて周りを観察すると、周囲には人影や他のモンスターのような存在も見当たらないが、とんでもなく遠くには、大きな剣のようなものが見える。ホロライブの動画で見たことがある。例の剣だろう。

地面に突き刺さったそれは、日の光を浴びて美しく、透き通るように輝いていた。

「あー、きこえるー！ ルーナ!!」

かなたが両手を口元に充てて叫ぶと、ぶんぶん、と地上で手を振るルーナとルーナイトの姿が見えた。

アイドルとして発声練習を重ねたかいたがあったというものだ。

「あつちのほうに村みたいなのが見えるよ！ 道もあるみたいだし、人影も……ああっ!!」

悲鳴を上げたかなたは急いで着陸すると、ルーナに詰め寄って続けた。

「なんか、村が襲われてるんだけど!」

「なんらって!? またゴリラだったのら!?」

「……」

ルーナは冗談のつもりで発した言葉に、かなたがツツコミを入れない事に驚愕する。

それは、長年の付き合いからそれが的中していたからではなく、もつと悪い事態が進行していると察したためだ。

「ルーナに一つ聞きたいんだけど」

「な、なんらよ?」

神妙な面持ちで、かなたはその核心を突く。

「アヒルって、空飛べるんだっけ?」

8. なんも聞いとらんかったというか、効いとらんかった余

「ははっ、楽勝」

「緊張したけど、簡単だったわな」

「だ、大丈夫かな、ほ、本当に支配できたのかな？」

人気のない某所に、ローブ姿の男が三人立っていた。

「そーいや俺達、一人ひとりスキル違う訳？」

「……違うみたいだな」

「そ、そうなの？」

その目の前には三人の少女。

「俺はだな、【名前】」

その名前の通り、吹雪のように純白の髪はさらさらと風に揺れており、頭頂部には風に抗う雪山のように立派な獣耳が生えていた。空を映したような水色の瞳は、どれほど透き通った湖面でさえ、その美しさを正確に映しとることはできないだろう。

彼女の名前は白上フブキ。

「僕あ、【毒薬】だな」

黒い長髪に赤いメツシユのようにひと房の赤髪がさらりとなびく。ぴん、とはった耳は警戒するように時折ぴくりとはねており、オレンジがかった視線は——現在のよう意思のない瞳でなければ——彼女の柔らかなほほえみとともに優しい印象を与えるはずだ。

彼女の名前は大神ミオ。

「ぼ、僕は【呪文】みたいだ……」

他の二人の少女に比べると小さな体躯に、赤白黒の三色に統一された装束を身に着けている。腰には無骨な二刀を帯び、光に透ける銀髪からは二本の角が突き出ている。その非日常と人外の象徴が、彼女の和装と合わさってどこか浮世離れた印象を見るものに与えている。

彼女の名前は百鬼あやめ。

彼女は意思を奪われて無表情——いや、何故か理解が及んでいない

ような、不思議な顔で空を眺めていた。

と、その目の前に、三人とは色の異なる赤ローブの男が瞬間移動でもしてきたかのように突如現れる。

「お前たち、仕事は済んだか」

三人は少々驚いたようだが、精いっぱい虚勢を張って答えた。

「別に、何も問題ナツシング」

「言われたとおりにやってるよな」

「そ、そうだよ、ひひひ」

軽薄で中身のない報告を聞いた赤ローブから猛烈な圧力がかかる。

それは言葉からくるものでも行動からくるでもない。おそらく、積み重ねた年季が三人とは違うのだろう。

一部の動画配信者が使いこなす、無言の圧のようなものだった。

「……ふむ、まあ元より、貸し借りも利害関係もないお前たちを信用してはいないが」

それと、と今後の行動についてあれこれ指示しながら、赤ローブは百鬼あやめをじろりと見て、肩をすくめる。

（これはこれは……）

指摘しようとして、その義務がないことに気がついた赤ローブは、状況がわかっていないらしい部下に、せめてもの忠告を残す。

「せいぜい、【魔王】の機嫌を損ねるな」

姿も存在も、その気配すら立ち消えるように。

赤ローブはその場からいなくなっていた。

漂っていた緊張感が薄れるや、三者三様にローブ男たちは悪態をついたり、地面を蹴飛ばしたり、不満そうに当たり散らしていた。

と、そんな挙動を見てようやく、ふわふわとお散歩に出かけていた魂が、どこかから帰ってきたとでもいうかのように、ぼーっとした表情にやや焦ったような感情が宿った少女が一人。

（……やべ、余なんも聞いとらんかった！）

他でもない、百鬼あやめである。

（ゲームのチュートリアルだと思っと思ったから、人間様の話を聞き流してしまった！）

ちなみに、彼女を支配しようとしたローブ男のスキルは正確には【支配：「呪文」】。

ラミイを支配した【鬼ごっこ】と同じで条件をクリアした相手を支配するスキルであり、その効果は一定の呪文を相手に聴かせることで発動する。

なお、呪文は「聞こえる」のではなく、「聴かせる」必要がある。つまり、聞き流されると普通に無効化される。

（やばい余！ また何も聞いとらんかったのかって怒られてしまうぞ……！）

ただ、このスキル、弱いわけではない。

【呪文】は、状況を整え演説など、一对多の状況で広範囲の存在に影響を与えることができる点に強みがある。また、単純な命令だけなら戦闘中でも相手に影響を与えられる。

要するに、使い方と使う相手を間違えているのである。

「ね、ねえ……？」

「な、何だ!? 余、ちゃんと聞いとったぞ！」

一言目から、ほぼ自白である。

「えっと、支配できてるのこれ？」

「……た、たぶんできとるぞ」

「な、なんで自信ないのさあ!?!」

しどろもどろになりながら、とりあえず話を合わせてみるあやめだったが、それ以上に慌てるローブ男のせいもあり、しばらく会話にならなかった。

しかし、会話の合間に漏れ出る情報を整理して、ここがゲームに似た異世界らしいこと、目の前の存在が敵で自分たちを支配しようとしていたことなど、概ねの状況を理解した。

（これは余、^{スパイ}間諜となつて皆を助けねばなるまい。さりげなく情報を集め、機を見て皆を助けるのだ！）

どう考えても危うい決意を、人知れず固めるあやめだった。

性格的にも能力的にも、驚くほど向いていない。

というか、腰に帯びた刀で敵三人の首を獲るリアルタイムアタック

したほうが、まだ勝機がありそうですらある。

しかし、獅白ぼたんと異なり、どうすればミオとフブキを元に戻せるのか、という問いかけにヒントすら与えられていないあやめにとつて、この判断は現時点では最善ではないが次善解といって良い、的確な判断でもあった。

「ところで人間様よ」

「な、なに？」

そんな、悲壮な決意と無駄なやる気に満ちあふれた百鬼あやめは、
「ざりげなく」と心の中で唱えながら、ローブ男に問いかけた。

【魔王】とやらの目的はなんなのだ？」

9. カモ+アヒル+ハクチヨウ+スバルⅡうるせえのら

「うるせえのら」

ルーナは町が視認できるくらいの距離になった頃、少し眉をひそめてそうつぶやいた。確かに、「クア！」だの、「ガア！」だの、「プオ！」だの、「シュバツ！」だの鳥の鳴き声が響き渡っていた。

周囲には白い羽毛がおびただしく散乱しており、途方もない数の鳥たちが周囲をはばたく影が、小さな陰影を大地に落とし込んでいる。

「気のせいか、僕今スバル先輩の……その……」

「鳴き声が聞こえたのらー!」

「ちよ、折角言葉を選ぼうとしたのに!?!」

かなたのツツコミが鳥の鳴き声にかき消された一方その頃、上空を飛び交う鳥の中に一羽、一線を画す存在がいた。

空を飛ぶために洗練されたフォルム、純白の羽毛にかたどられたやや小さな翼、黄色のくちばし。

しかし、その鳥の頭には何故か、やや淡い赤白青の散髪屋トリコロのクルクルコロに似たカラーリングの帽子が乗っかっていた。

「しゅばあああああ!! (訳：誰か助けろおおおお!!)」

まあ、スバルである。

より正確には、スバルドダックと呼ばれる、スバル初期装備の帽子をかぶったアヒルである。

しかし、中身は真正正銘、ホロライブ所属のアイドル大空スバルだった。

「しゅばー! しゅばー! しゅばあー! (訳：異世界ものくらい知ってるっすけど、転生したらアヒルはねえだろお!!)」

スケルトンとか、スライムとか、ゴブリンが定番だが、そのどれより弱そうである。

さて、「オルタナティブ」をプレイしていたスバルは、現在の状況を詳しく把握しそこなつてはいたが、夢オチでなければ非常識かつ異

常事態”であることまでは理解していた。

ゆえに、空を飛んで状況把握に努めていたのだが、どういう訳か周囲の似たタイプの鳥たちが追いかけてくるのだ。初めは縄張り意識のためかと思っていたスバルだったが、その考えが間違いだと、鳥たちの様子から理解するに至る。

「しゅばっ！ しゅばあああ！（訳：他の鳥マネしたら飛べるようになったつすけど、何でこいつらスバルに変な視線を向けながらついて来るんすかあああ）」

そう、異世界系につきものな、逆ハーレム状態なのである。

ただし、相手は鳥だ。

主にカモとアヒルとハクチョウだ。

そんな風に、スバルが鳥類相手に誰も幸せになれない逆ハーレムを構築しつつある頃、地上ではかなたとルーナが首をかしげながら空を見上げていた。

どうやら、村が襲われているというよりかは、群れを成した鳥類がスバルに向かって殺到しているらしかった。

「どれがスバル先輩かわかる？」

「そもそも、どれがアヒルなのらっ？」

「……」

「……」

もしも、この場に獅白ぼたんがいればスキルと持ち前の視力、そして深い知識から見分けがついたかもしれないが、この二人には無理だった。

どうしようか、と考えあぐねている二人の頭に直接響くような機械的な声が聞こえたのは、その時だった。

「クエストの受注条件を満たしました」

「え？」

「なんなのらっ？」

困ったときのシステム画面と、二人がメニューを開くと新しく「クエスト」という欄が追加されていた。

いぶかしげにその欄を選択すると、

「クエスト：野鳥のアヒージョ」

「僕たちに何をさせる気だよっ!!？」

「さすがに食いたくねえのら!!」

野鳥を倒して食料にしろという意味なのか、それとも、某ウサミミ少女の野うさぎリスナー的な意味で、「野生のアヒージョリスナーが現れた」といった意味のダブルミーニングなのだろうか。

「僕は空を飛んでスバル先輩探すから、ルーナは援護をお願い」
「気を付けて行ってくんぞで！」

飛翔する天使としゃがみこむ姫君は、舞い散る白い羽毛も合わさって少しかけ神々しかったという。

「ルーナイト、来てほしいのら」

ところでこの時、ルーナは無意識に願っていた。

これまで二回召喚したルーナイトだったが、彼らはどちらも近接装備であり、現在のように飛行する敵を相手にすることは向いていない。

だから、遠くを攻撃できるルーナイトに助けて欲しい。

「ルーナイト召喚」

地面に光輝いた魔法陣から、甲冑が立ち上がる。

「むむむ……？ 君、三人目なのらね？ また違う子が来たのら！」

胸元や関節を保護する軽装の装備に、木でできた大弓、矢筒。

簡易な擬態カモフラージュと防御を両立させる使い古された毛皮のマントを身にまとう。

露出した筋肉が見て取れる肌は日焼けして、悠久の時を経た岩盤のように固く引き締まっていた。

「ルーナイト、スバルちゃ先輩を助けて欲しいのら」

こくこく、とルーナイトはうなずくと弓に矢をつがえる。

「ルーナイト召喚：弓兵解放」

もし、獅白ぼたんがこの場にいれば、ルーナのスキルが成長したことを理解できただろう。

10. 言葉なんてなくても、私たちは分かり合える
(目の前に迫る拳)

ラミイを正気に戻したぼたんは、村や町を避けて高速で移動することにした。

既設の街道こそ通るものの、その間に情報収集した地理や地形の知識から、ここアマティアスの首都——その名もアマティアスだった——を指していた。

ひとまず、他のホロライブメンバーの情報を収集する事を目的とするなら、人口が多い場所に行った方が都合がよく、自身の能力を考えれば、多少強い敵は蹴散らせる。

そう言った判断から、ゲーム性を無視して他のホロライブメンバーと主にラミイの安全を考慮したししろんは、本日、朝日を浴びてこの辺りを縄張りとする盗賊団の根城で目を覚ます。

「うううーうーん!!」

「……ううう。すう、すう」

隣でぼたんの起床を感じ取った青髪の令嬢がうなっていたが、直ぐに眠りの世界に落ちてしまったらしく、かわいらしい寝息を立てていた。

布団を被せ直すと、機嫌が直ったように笑みを浮かべる彼女の頬をつんつんして、一人でニンマリするぼたん。

「ししろおん……」

「……ラミイの夢に私がつ!!?」

思わずベッドから立ち上がる獅白ぼたんは、寝言すら可愛いラミイに「自主規制」な笑みを浮かべながら、未だに寝ている無防備なラミイを残して部屋の外に出た。

その時には朝のまどろみや、少しだらしない笑みは既に消えている。キリリとした冷静なまなざしと引き締まった口元からは、高い知性と確かな自信がにじんでいた。

「おーい統領、ここらで私たちは失礼するぜー」

「おう、起きたのか」

片手を上げる粗野な振る舞いで返事をしたのは、朝から骨付き肉な
んぞをほおぼっている初老の男性だった。

彼こそ何を隠そう、この場所——既に家がとり潰しになった貴族の
元別荘——を根城にした盗賊団の統領である。

「首都では、俺が言うのも野暮だが気をつけろよ。俺達みたいな目に
見える悪い奴なんぞ、三流もいところだ」

「ははっ、ギャンブルでイカサマして成り上がったっていう統領が言
うと、なんか説得力あるね。気を付けるわ」

「クエスト」でこの統領と若頭の間で発生した対立を解消した獅白ぼ
たんは、盗賊団の面々から一定の敬意を払われていた。

統領の貴族と豪商しか襲わず、基本的に敵対しない人を殺さない義
賊的な派閥と、とにかくお金を稼いで貴族などの繋がりを得て地盤
を固めたい改革派な若頭。

両者の仲裁をかって出たししろんは、全員を拳で分からせるとい
う、非常にシンプルでえげつない方法を採用した。

①戦闘開始、②殴る、③起き上がるのを待つ、④戦意を確認、①に
戻る。

これを相手の心が折れるまで全員に繰り返したのだ。

反抗的になるかと思いきや、その圧倒的カリスマと武力を前に、む
しろ信仰に近いまなざしを向けられたので、

「こいつら全員ド○なの？」

「ししろんっ!? センシティブだよ!」

という会話がぼたんとラミイの間で発生したりしたが、それはさて
おき。

分からせる 戦いの途中^分でちよつとワクワクした顔の若頭から「多対一でもい
いつすか」という発言が飛び出し——つまりは、そもそも仲裁のため
に戦っている、ししろんの目的を放り投げろという、画期的な提案が
なされた。

そしてそれは、ちよつと運動していい感じに体が温まってきた獅白
ぼたんにより、特に意味もなく受理され、着地点が誰にも分からな

ゲーム
い試合が始まった。

そして、行き着くところまで行った結果、獅白ぼたんVS盗賊団全員という戦いになり、それでも圧倒的力でねじ伏せるしろんに、盗賊団側が一周回ってなんだか楽しくなってきたのは事実。……殴られすぎて頭がおかしくなっていないければ。

一部の感想を抜粋すると、「勝てる気がしねえ……」「開始と同時に姿が見えなくなったぞ!」「姐御ばねえ!」「相手一人なのに複数の方向から飛び道具が飛んでくるんだけどお!?」「なんだか派閥争いが馬鹿らしくなってきたわ」「一撃だけでもいれるぞ統領!」「おう、おめえ意外と根性あるじゃねえか」「姐御のお陰であの剣呑だった統領と若頭に友情が……」「姐御……初めからこれが狙いで」「あるあ……無えよ、ただただ合法的に遊べて楽しそうな顔してんじゃねーか!」「逃げられないから立ち向かってるだけで既に心は折れてんだよお!!」

心が折られた者達の阿鼻叫喚はさておき、概ね丸く収まった。歯車のデコボコを適当に叩いて丸くするような方法ではあったが。

「統領、もし私達みたいな不思議な格好の奴がいたら、私に知らせてよ」

「おお、分かってるぜ。探してるお仲間だな。……野郎ども!」

現在、彼らがいるのは比較的大きなホールで、現在は食堂として使われている。

朝のいい時間という事もあって、統領の呼び声に応える部下は多い。

「応! わかってんぜ姐御!」

「見つけたらすぐ知らせるからな!」

「姐御のご指示とあらば何が何でも!」

そこはかとなく熱心なファンのような反応であった。

彼らの決意表明の声が大きかったのか、遅れてラミイが姿を現した。

まだ少し眠そうで、青い長髪もどこかほつれており、一度顔を洗った方がよさそうだ。

「ラミイ、ちよつと身だしなみを整えに行こう」

「うあ……うん、わかったあ……」

完全に寝ぼけた様子のラミイの手を引いて、ししろんは部屋に戻らせると、「アイテム」から身だしなみを整える道具とともに、僅かに青みがかった透明な液体が入った小瓶を取り出した。

「はい、寝ぐせ直すから後ろ向いて」

「はい。ししろんは良いよね。私寝ぐせ酷くてさあ」

「別に、ラミイの役に立てることが増えるからいいよ」

「ふふ、またそんなこと言って」

いちやこらしながら髪をくしけずり終えたぼたんは、先ほど取り出した青い液体が入った小瓶の蓋を開け、明鏡止水の眼でその正体を確認した。

「ラミイ水：雪の令嬢が生み出した氷雪が溶け出した水。非常に純度が高い水だが僅かに混ざった成分により、体力等が回復する。売ると割と早く売り切れる。常温で放置すると変質することがあるので、取扱注意」

(どうしてこうなった！)

ラミイのスキル、「雪の令嬢」で発生した雪を飲み水にできないかと溶かしてみたところ生まれた、謎のアイテムである。

ぼたんは、それをためらいなく飲み干した

効果がいかにかは不明だが、ラミイ水という響きが今日もししろんの活力となる事は間違いない。

「ししろん、それ飲むの好きだねえ」

「……うん、好きだよ」

「ねー、今なんで照れた感じになったの？」

アイテム名は、口が裂けてもラミイには教えられないが。

11. 飛ぶ鳥を落とす勢いってたぶんそういう使い方しねえのら

空を舞う鳥類の群れの中から、的確にアヒルと化したスバルを見つけるのは非常に困難だった。

その小さな翼で空を飛ぶかなたは、間違えてスバル先輩を攻撃してしまつたら、と思うとためらってしまい、伸ばしかけた手を何度も引つ込めていた。

天使の翼と悪魔^{ゴリラ}の握力を持つ彼女の攻撃は、空を飛ぶために華奢な形態をとる鳥たちにとっては、必殺に等しい。

しかし一方で、地上からルーナイトの射かけた矢は一羽、また一羽と寸分たがわず鳥たちの翼を射抜いていった。

「すげえのらけど、君、スバル先輩の見分けついてるのら!!」

コクコク、とうなずく弓を構えたルーナイト。

頭を押さえるような動作から、帽子で見分けていることが分かり、一安心するルーナ。しかし、まだ不安がぬぐえないのか、落ちてくる鳥たちをみて言葉を繋いだ。

「それじゃ、どうして翼を狙うのら?」

首元をかつ切るような動作をした後、ルーナイトは手に持った何かをひっくり返すように腕を動かした。

「血抜きするつもりなのら!!? ガチなのら!!?」

どうやら、姫様に可能な限り新鮮でおいしい野鳥のアヒージョを提供するつもりらしかった。

やめて差し上げろ。

「え、それなら早く言ってほしかったのらつて?」

勘違いに気が付いたルーナイトは、弓に複数の^{リボルバー}矢をつがえるや、先ほどの二倍以上の速さで射出し、鳥たちを射抜いていった。その精度こそ、胸元やお尻のあたりに時折当たっているのを見ると僅かに落ちているようだが、外れた矢は一つもなかった。

恐ろしい精度である。

「ヤベエ奴が来たのら」

打ち抜かれた鳥たちは魔物と同様、墜落する途中で絶命したのか光の粒子になって散り、雪のように解けていった。

ひとまず、血抜きが必要はなさそうである。

さて、非常に頼れるルーナイトに若干引き気味の姫様はおいで、かなたとルーナの目的はスバルの救出である。

「スバルせんぱーい!!!」

上空で必死で叫ぶかなただったが、その声をかき消すように鳥たちが鳴く。

と、ルーナが地上から手を振っているのが見えたかなたは、一度地上に降りることにした。

螺旋を描きながら降下し、最後にふわりと大きく、翼を振って着地する。

「ルーナイトがスバルちゃ先輩の見分けつくみてえなのら」

「ほんとに!?!」

コクコクとうなずいた後に空を指さすルーナイトだったが、かなり高速で移動しているらしく、その指先は夜空の星座を結んでいるかのようにふらふらと動いていた。

とてもではないが、指示をもらってから飛び立って追跡できる速度ではない。

「うーん、何とかリアルタイムで方向が分かるといいんだけど……」

「この子抱えて飛ぶのら?」

「飛翔能力までゴリラちゃうわ!」

わちゃわちゃと言いつ争っている、やれやれ、といった雰囲気を出したルーナイトがルーナに片手を握り締めて上にあげる動作を繰り返した。

かなたは首をかしげていたが、ルーナにはそれが何を意味するか分かったようだ。

「え、〃応援〃してくれたりいけるのらって? そんなうまい話があるわけねえのら。君、ルーナにセンチティブな事でも言わせたいだけなのら!」

「なんで身振り手振りで意思疎通できてるのかはおいといて、ルーナイトはなんて言ってるの？」

「ルーナが『応援』したら魔法の矢が撃てるらしいのら」

ルーナの目から見ると「やれやれ、嘘とは失敬な。姫様は自分の力をまだ自覚していない御様子。滑稽極まりないですな」といった、とても具体的かつ繊細な雰囲気醸し出すルーナイト。

かなたから見ると一人でルーナが勝手に怒っているように見えるので、何故意思疎通が成立するのか甚だ疑問であった。

正直シニールである。

「あー、もしかして、スキル？」

「……あ」

ルーナは思い当たる節があつたらしく、すぐさまメニュー画面からスキルを選択した。そこには確かに、「アクティブスキル：ルーナイト召喚 パッシブスキル：応援」と書かれていた。

ちなみに、これらの画面は使用者の意思で遮断・共有可能なので、うっかりしていた姫様の見ている文章は、残念ながら横からのぞき込んでいた天使や騎士も見ることができた。

ものすごい、ジト目で。

「……すまねえのら」

屈辱的な顔で謝る姫様に、騎士はやれやれといった雰囲気醸し出しながら【応援】を要求した。

「うーん、なるほどなのらあ」

「どうしたの？」

「どうやら、ルーナの言葉でやる気が出るとバフがかかるらしいのら」
「なんてアバウトなスキル……」

「士気が満ちあふれていれば、あの空に浮かぶ月でも射抜いて御覧に入れましょう」と言いたげなルーナイトと、何を言えいいのか思案するルーナ。

「えっと、頑張ってくれたらルーナとっても嬉しいのらー！」

「……」

「……」

「……」

「草に草を生やすんじやねえのら！」

「ふふっ、今回はなんて言われたか分かったよ」

おそらく、「草w」と返したルーナイトは弓に矢をつがえる動作をする。ただし、その手に矢はない。

と、まるで鳥やモンスターを倒した時とは逆にその手に光の粒子が集まり、半透明の矢が形成された。当然のようにその矢を射出したルーナイトだったが、撃たれた矢は数メートル進んだ後に空中に静止する。

すると、ルーナイトは手招きするような動作をした後、グツと手のひらを握って見せた。

「あまねちや、あの矢をつかんでほしいって言ってるのら！」

「わかった」

ルーナに言われた通り無警戒にその矢をつかんだかなただだったが、直後に後悔することになる。

矢がものすごい速度で目標まで飛び始め——信じられない事になったの体を引きずるように空に向かって飛び始めたのだ。

まるで、空に落ちていくような速度である。

「ああああああああああ!!!」

「あまねちや!」

見上げると、既に鳥たちがいる高度に達していた天使に、何もできないと悟った姫様が無意識のうちにとっていたのは「敬礼」の姿だった。口がぽかんと開いているのはご愛敬である。

そういえば、某ゲームでいたずらで空に射出された時、ルーナもこんな風に焦った記憶があった。

「……ところで君、クールなフリして意外とテンション上がってるのらね?」

現実逃避も兼ねて、どや顔で尋ねる姫様から、ルーナイトは目をそらすように明後日の方向を向いていたという。

12. 相手のセーブデータごと斬り落としそうな勢いで

「【魔王】とやらの目的はなんなのだ？」

あくまで「さりげなく」問いかけた百鬼あやめの疑問に、言葉を介して支配をしたつもり【呪文】のローブ男は少し悩んだそぶりを見せた。

あやめは初め、彼が答えていいか迷っているのかと思ったのだが、その答えは予想斜め上であった。

「ご、ごめん、知らない」

「!!？」

「で、でも、僕や君たちも、赤いローブの人はゲームの駒だって言うてた」

「ゲーム？」

「あ、うん、白と黒が逆^{upside down}になる、まるでオセー——」

「待ったあ！」

突如大声で話を遮ったあやめに、分かりやすくびっくりするローブ男。

「おっと、急に大声を出してすまんかった。だがその……そのゲーム名はリバーシと呼ぶべきだ」

「ど、どうして？」

「オセなんとやらは商標登録されている……いや、配信ではないからいいのか。いい、忘れてくれ」

「？」

忘れないでくれ。怒られる。

そんな声がどこかから聞こえそうな百鬼の反応だったが、ローブ男には意味が分からないようで、続きを話し始めた。

「で、でもその、【魔王】や僕らは「黒」で、君たちは「白」だって言うてたよ。は、はは、やっぱり僕らなんてそうだよね」

「うん？ 何を落ち込んでいるのだ？ そうだ、この大太刀を見よ！」

百鬼は腰に付けた金具を外すと、大太刀【羅刹】を目の前に掲げた。
「この鞘も柄の装飾も、余が誇らしく思うほど鬼の技術が詰まったものだ」

「……」

「余は色も好きだが、よく見れば仕事の丁寧さや使う者への気配りすら感じられる。だから、色が多少変わったところで、余は同じ鬼に仕事をお願いするだろう」

ローブ男は百鬼の伝えたい意味を理解して、突き付けられた事実やややひるんだ様子をみせたが、支配が効いていることを思い出したのかすぐに安堵のため息をついていた。

「そ、そういうえば百鬼さんのスキルって何なのかな」

話題をそらすように尋ねるローブ男に、百鬼は思案しながら答えることにした。

「せいやー！ つと」

風すら切り裂く一閃は、振り下ろされたことに後から気がつく程。

あやめがその手に持った大太刀【羅刹】を自分に向かつて振り下ろしたのだと、遅れて気が付いたローブ男は尻もちをついた。

「な、なななんぞ!? し、支配したのに!?!」

「うん、驚いたか? この刀は少し特殊なのだ」

見えなかったのか、と思ったあやめは今度はゆっくりと自分の首を斬って見せたが、その首は繋がったままであり、刀身に血液の一滴も付着していない。

「斬りたいものだけを斬る。それが【羅刹】の能力なのだ」

「そ、それって強いのか?」

「例えば、遮蔽物や鎧を透過して敵を斬れるし、なんなら人体を傷つけずに服だけ斬ることもできるのだぞ?」

「そ、その例えはどうかなのかな?」

頭上に「?」を浮かべて首をかしげるあやめに、何を想像したのかローブ男は焦った様子でそう返した。

「もう一振りは【阿修羅】」

【羅刹】より短く赤を基調とした装飾を施された刀、【阿修羅】をあや

めが引き抜くと妖しい光を放つ炎がその刀身をおおう。

「鬼火を使役する太刀で、ちよつと力を籠めると遠くにも攻撃できるぞ」

「お、応用が利きそうだね」

「だが余は加減が苦手だな。昔島を一つ消……いや、やはりなんでもない！」

「な、何をしたのかなっ!？」

不穏な説明にツツコミを入れるローブ男と、くすりと妖艶さを醸し出そうとしながら、その実子供らしい無邪気さが割と前に出てしまっているあやめは、和気あいあいとした様子であったが、その実あやめは重要な役割を担っている。

スパイという、重要な役割を担っているつもりだった。

（よし、スキルとやらは何かわからんが、人間様に比べて不思議な事ができるといえば、この刀だからな……余、上手くだませたぞ！）

ちなみに、この世界に来たホロライブメンバーにアクティブスキルとパッシブスキルが一つずつ、ローブ男たちにはどうやら支配系の何らかのスキルが一つ使える状態になっているようである。

故に、あやめの誤魔化しはこのルールを逸脱しているし、何ならメニユー画面のスキルを開いて共有すれば、このように表示されるはずである。

【アクティブスキル：嫌^やだ余 パッシブスキル：二刀流】

しかし、その事実を、一人の鬼と、一人の人間は、まだ——知らない。

13. 敵から見たらどう考えても初見殺ししらみ

夜。

それも、煌々と輝く松明を並べてもなお、夜空の星々が輝いて見えるほどの暗い夜には、思わずあくびが漏れてしまいそうになる。

アマティアスを二分する暗部、裏の組織である東の盗賊団と抗争を繰り返す、西の山賊団のアジトで見張りを務めている男は、高く組まれた矢倉の上で暇そうにしていた。

背後には山賊団の居城である古城、前方には鬱蒼とした森林と真黒な山脈が星々を遮るカーテンのように陰影を落としている。

その男が見張りに立っているのは木で組み上げられた数メートル程度の高さの矢倉で、四角い塔のような形をしており、見張りと防御、戦争時には遠距離攻撃の拠点となる防御施設であった。

「ウチに攻めてくる命知らずなんていないのに、ボスは神経質だな」
「……おい、夜中とはいえ、誰かに聞かれたら——」

たしなめる真面目な相方の声が突然聞こえなくなったため男がそちらを見ると、

「つたく、寒いからってきつい酒を飲みすぎたかオイ」

男は呆れた様子でその、明らかに哨戒中みまわりに飲むべきではない火酒をおおると、相方の横腹をコツコツと蹴った。

「おい、ふざけてんじやねえぞー!」

コツコツ、がいつしか打撲音に代わる頃、その衝撃でうつ伏せから仰向けに転がった男の額には、何やら注射器?のようなものが突き刺さっていた。幸い死んでいないようだが、金属でできた数センチの物体は、何らかの攻撃であることは明らかだ。

「て……ててて、」

急速に冷める酒気に、ようやく事態の認識と呂律が追いつく。

「敵襲!・敵襲だ!!! 野郎ども!!!」

「状況は？」

腕を組み、部下の報告を待っていたボスはやや神経質に人差し指で腕を叩いていた。

顔はローブのようなもので隠れて見えないが、いらだつ声はボスが若い女性であることを示していた。

「分かりません。敵の数、距離ともに不明。正体不明の飛び道具で次々に手下どもがやられています」

報告を聞くや、ボスは外に繋がる扉を蹴破るような勢いで開けて外へ出た。

「ボス!？」

「しっ……静かに」

目を凝らして、ボスはじつとアジトの外の暗い森の、影絵のようなざわめきやどっしりと不動を貫く山脈を見つめた。

そして恐ろしいことに、それは音を貫いてボスと報告した部下の眼前まで到達する。

「ひっ」

「……」

それは、銃弾だ。

しかし奇妙な事に、その弾丸はボスと部下の目の前で静止してそれ以上動かなかつた。つ、とボスはその弾丸を摘まみ上げて観察する。

「……この世界にも銃があるの?」

「ボス?」

数秒観察した後、ボスが摘まんでいた銃弾は不思議な輝きの後、消失した。

「通達! 武器の性質は分かりました。おそらく、超遠距離からの狙撃です。遮蔽物に身を隠さない! この武器は直線的な攻撃しかできません!」

「は、はい!!」

「魔法が使える方は壁を作るか、風や水の流れで軌道をそらしなさい! 勝てる戦いです! 冷静に身を守りなさい!」

そう言いながらも毅然と足を進めるボスに何度も銃弾が飛んでく

るが、その全ては見えない何かにからめとられるようにして、空中に静止しては消されていく。

「落ち着いてください。この攻撃は、せ……ボスの防御を突破できていません」

的確な判断と指示でもって士気を高めながら、山賊団のアジトから打って出ようとしたボスだったが、突如としてさらなる異変を感じる。

暗い。そして、極度に寒い。

先ほどまで満天の星空が広がっていた空は、ところどころかすんでしまつて、雪が降り始めていた。

極端な温度の変化は再びの混乱を生む。

そしてそれを皮切りに敵が銃弾をボス以外へと標的を変えた。

「くっ」

「なんだこれ、うわっ」

「モンスターまで出やがったぞー！」

さらには、何故か雪が降り積もり始めたあたりから、周囲に白い熊のような小型のモンスターが出現し、山賊たちを襲い始めていた。

幸い、相手にこちらを○す意図はないようで、撃たれた山賊たちは皆気絶しているようだが、それにしても超遠距離からの狙撃に、古城の防衛機構を無視した城内へのモンスターの召喚。

どう考えても相性が悪すぎる。

(籠城は……すべきではありませんね)

拠点という地理的な優位性が完全に失われているうえに、自分たちには援軍を要請する相手もない。ならば、迅速に敵を排除すべきである。

ボスは即座に判断すると、先ほど報告をしてきた部下に一旦指揮権を委譲する。

「単騎で出ます」

「……人数が多ければ行軍速度が落ちていい的、散開すれば能力に劣る俺たちは各個撃破されるから、ですか」

「理解が早くて助かります。軍師くん」

「ガラじやねえです、ボス」

ツルツル頭をバンダナで覆っている大柄な部下が恥ずかしがっているのを一瞥すると、少しだけ笑って肩の力を抜きながら、ボスは古城の外へ駆けた。

「テメエらしけたツラしてんじやねえ！ ボスの出陣だ！ 声張れ!!!」

「おおおおおおお!!!」

軍師、などとからかわれた意趣返しか、残された部下はボスの勝利を祈願し、自らを鼓舞するために部下とともに野太い咆哮を夜闇にささげた。

14. 旅の行商人、その名は……

「ふう、酷い目にあつたよ」

「なんかすまねえのら」

げつそりとした様子の子の天音かなたの両腕には、カラフルな帽子をかぶったアヒル——大空スバルが抱えられていた。

鳥の群れにルーナイトの放った矢をつかんで特攻したかなたは、無事、スバルを見つけることができた。が、どうやらあの矢、スバルを絶対に傷つけないように生物を避けて通るような効果があつたらしく、無数の鳥たちの中をジェットコースターのように駆け抜けていった。

その矢をつかんだかなたの正気度^{SAN値}を削り取りながら。

「でも、あまねちやは空飛べるのにそんなにしんどかつたのら？」

「なんていうか、車酔いとか船酔いに近いかも。自分の意思で飛んでないからさ」

「何となく理解できたのら」

そのような軽いやり取りを繰り返している二人は、鳥たちに襲われていた町の中にいた。

それほど大きな被害はなかつたようで、せいぜいがところどころに羽が落ちている程度。モンスターがはびこるこの世界において、鳥の大量発生などカモ^{食料}がネギ^がしょ^{っぱい}よつてきた程度にしか認識されていないのかもしれない。

事実、ルーナに抱っこされたスバルの姿を見ても、驚いたり嫌悪するような反応は見られなかった。

「それにしても、異世界って感じだねえ」

「……そうなのら。ひとまず、宿が取れたら見て回りたいのら！」

かなたが努めて明るい声で話題を振ったことを察した姫様は、わざと気づかないふりをして暢気に返した。スバルが沈黙しているのも、疲れからではなく微妙なその機微を読んだためだろう。

彼女たちが歩いている町はレンガと木でできた町並みが広がっており、寂れてはいないが地方都市といった雰囲気の町のようなのだ。実

際、半日もあれば町中を一回り散策できそうだった。

「あ、ちよつと君たち!」

と、そんな町を歩く二人と一羽を呼び止める声。

場所は町の中心からややはずれ、商店が立ち並び始めたあたりの場所であった。声は少し頭上から聞こえたので振り返ると、二頭立ての馬車の荷台から帽子を手につかんで彼女たちに振っている男の姿があった。

年の頃は中年に差し掛かり、しかしその肉体は壮健。紳士らしい装いながらヒゲが濃く少し暑苦しい雰囲気きふきの男だが、敵意が全く感じられない少し困った表情を浮かべていた。

「もしかして、あの鳥を追い払ってくれたのって君たちかな?」

突然の質問に顔を見合わせて首肯する彼女たちに、男は馬車から降りるや、服の襟を正して頭を下げた。

「ありがとう、おかげで助かった」

聞けば、行商人である彼らはとても大事な荷物を運搬中に鳥の群れに襲われ、近くの街道で立ち往生をしていたそうだ。そして、「もしやこの鳥の群れは強大なモンスターモンスターの手下なのでは」という疑心暗鬼の元、馬車を破棄し荷物だけでも死守しながら決死の突破を図ろうとしたところ、突然鳥の群れが撤退を始めた。

意味が分からなかった彼らだったが、何者かに助けられたのだと思いい、この町で話を聞きまわったところ、かなた達に行き着いたのだ。た。

「我々が運んでいた荷物は」

ここで二人と一羽に近づいた商人は鋭い表情で、声を潜めて、
「とても重要なものだった。詳しくはいえないが、ね」

再び柔らかな笑みを浮かべた彼は、紳士然とした挙措でかなた達に問いかけた。

「我々行商人は、持ちつ持たれつ——いわば貸し借りを大切にする。金銭の損得以上の、利益と損害を生む天秤てんびんだと知っているからね。だから、君たちにお礼がしたいのだけど、何か助けられることはあるかい?」

かなたとルーナはアイコンタクトをして、状況を概ね把握した。

二人からすれば、この世界はゲームの延長である可能性があり、スバルを助けたイベントの先にこれが起こったのだとすれば、この申し出はいわば「クエスト」に対する報酬なのかもしれない。

そう一瞬で意思疎通を図ることができた。

「それじゃあ、換金してほしいものがあるんだけど、いいかな。僕たち価値が分からないから、信用できる相手をお願いしたかったんだ」

「あと、おすすめのお店とか教えてほしいのらう。おいしいご飯が食べたいのらう」

行商人を試すようなお願いと、欲がない答えに、紳士然と彼はこう返す。

「はいよ。では品物を見せてくれるかな。あと、お店については……この町に初めて来たのかな。それなら、簡単な地図を換金の間に用意しよう」

恐らく、この行商人は顧客の要望を的確に理解して対応できる優秀な人間なのだろう。かなたとルーナの求める以上の回答を、柔和な笑みとともに返してのけた。

「それじゃ、これなんだけど」

かなたが渡したのはいくらかの鳥の肉や羽毛——そして倒したゴリラの皮と牙だった。

これらは不思議な事に、倒した直後に「アイテム」に収納されていたので、おそらくモンスターを倒すとドロップアイテムとして自動で収納されるらしかった。

「……ほう」

牙や毛皮を主に見て驚く行商人。

「これは確かに、商いの相手を選ぶはずで」

訳知り顔の行商人に、とりあえず話を合わせることにしたかなたとルーナ。

「詳しくは聞きませんが、買い取らせていただきますでしょう。いやはや、これは参った。ははは……」

「やっぱり、分かるのらう」

妙な緊迫感とともに、換金に必要な道具なのだろう。虫眼鏡ルーベや秤ばかりの他にも、何に使うのか水準器、羊皮紙、地図や見たことのない道具の数々を行商人は取り出して査定した。

「適正価格に少し色を付けさせてもらいます」

男が合図すると、馬車の中からほっそりとした男と背は低いが筋骨隆々と言った様子の男が出てきた。そして、ほっそりとした男がずっしりと重みがあるとわかる布袋をあなたへ、背の低い男は今仕上げたのだろう地図をルーナへと渡す。

「うわ、赤限界スバチャっぽい色の硬貨だ。これ結構な額行くんじゃない？」

「勉強させていただきましたとも。まさかサンダーコングを討伐されるほどの腕前とは……」

「あ、あのゴリラそういう名前だったんだ」

「……ッ!!?」

突如、背後で会話を聞いていたルーナが名状しがたい声で嘖き出したので、あなたは首をかしげた。

「な、なんでもねえのら……」

何やら教えてくれそうにないので、あなたは行商人にお礼を伝えると、彼はにこやかな笑みを浮かべてこういった。

「どうぞ、これからギョリノフ商會をどうぞごひいきに!」

「ぶふっ、それを言うなら漁夫の利でしょ!」

「これはご存じのようで。何せ我々の社訓は『苦勞せず 純利益だけかすめ取る』ですからな」

「俳句好きなミオシヤ先輩に一回怒られる!!」

「ちなみに、その続きは『それこそが我ら ギョリノフ商會』だよ」
「短歌にも対応しちゃったよコイツ!!」

何処かおかしな行商人は、一通りあなたとかしまいましたり取り重ねた後、再び馬車に乗ってどこかへと去っていった。

15. 白い奴に限って降り積もった黒歴史は多い

「なあ、そろそろ手駒増やさね?」

「俺もそう思ってたところ」

「だ、大丈夫かな?」

白上フブキ、大神ミオ、百鬼あやめを支配した(と思っている)三人のローブ男たちは、数日をかけて一通り支配下の三人のスキルや自身のスキルの確認を行い、支配する相手を増やすべきでは、という意見が出た。

しかし、百鬼あやめを支配した【呪文】のローブ男、メガネをかけたおどおどとした彼は、どうやら慎重派らしかった。というより、他者を傷つけることに忌避感を覚える程度に、優しさを持っていたと言っべきか。

「なあに言ってるの? リスクのない勝負なんてないし?」

「そうそう、終わりよければ結果オーライ的な」

しかし、彼ら三人にも明確な力関係があるようで、二人は馬鹿にするように鼻で笑うと、百鬼を召喚したローブ男の肩に腕を回した。

「なあにシケたこと言ってるのよ、問題ナツシング」

「俺達あ、こんなスキルもらったんだから無敵だつて。それに彼女らあも強いからな」

「……」

その強さを証明されたからこそ、メガネのローブ男は苦言を呈したのだが、他の二人はわかっていないらしい。

なにせ、白神フブキと大神ミオにセンチティブなことをしようとして、二人が死にかけたのだから。

それを目の当たりにした眼鏡のローブ男は、人間が放物線を描いて空を飛んだ場合、割と地味な音で墜落するんだな、と現実逃避気味に眺めていた。

というか、素手で殴っただけなのにそれだけの威力が出せるのは、アイドルの身体能力としてどうなんだ、とも思う。

しかし、これらの出来事から、おそらく彼らの支配スキルには、一定以上相手の嫌悪感がトリガーとなるのか、あるいは彼女達の活動している動画配信サイトの制限に準じているのかは分からないが、隠しパラメータ的な拒否権のようなものが設定されているようだ。

(ぼ、僕らのスキルには、僕らが知らない制約と効果がある。そ、それを理解するのには、まだこの世界に来てからの期間が短すぎる)

もし戦闘中に支配が解けたらどうするのか、支配する駒の数に上限がある可能性は。

そもそも、三人の支配するスキルに差があることから考えて、まず間違いない長所や短所があるはずだ。

しかし、それらの主張が理解されることなく、とある村に滞在するホロライブメンバーをターゲットとして、村への奇襲作戦が計画されていった。

「な、百鬼さん、ちよつと相談があるんだけど」

「なんだ人間様、改まって?」

眼鏡のローブ男は、百鬼あやめにかいつまんで状況を説明した。

「ふうむ、なきりしもあらずだな」

「あ、あのね、本当に話聞いてた?」

「ああ、あの二人を止める密命ということだな。しかも、他の人間様二人に気づかれずにか」

「い、意外と的確に理解してたね!?!」

そう、眼鏡のローブ男は今回の襲撃をこつそりと失敗させ、あわよくば他の二人の警戒心をあおろうと考えたのである。

しかし、そのためには。

「先輩二人を相手に、正体を隠したまま引き分け以上の結果を出さねばならんということか」

「そ、そうなんだ」

「わかったぞ」

困難という言葉すら生温い条件を聞いて、百鬼あやめは腕を組んだ

ものの、笑顔でうなずいた。

その姿に、眼鏡のローブ男はある種の憧れを抱いた。

「すごいな、百鬼さんは」

「……？ どうしたのだ？」

「な、なんでもないよ。た、ただ……」

眼鏡のローブ男はきつと、百鬼あやめ達の対極に在る存在だから。夢を見て追いかけて、がむしやらに努力を続けて、いずれ追いかけた夢よりなお、遥かに輝く存在になる彼女達とは。

「うらやまし——いや、悲しいんだろうね。僕には僕が成功する未来が見えないし、君みたいに任せてって言えない。せいぜい、このスキルがなくなっても、君に見捨てないでって祈ることしかできない。僕には」

「……人間様、それは出来ない相談だ」

しかも、彼らは彼女達の敵なのだから。

「余や余の友達に手を出した人間様達を、余は許さない」

「……」

「しかし、」

この時、眉根を寄せていた百鬼あやめは、眼鏡のローブ男の前で、初めて心の底から花の開くように笑った。

「葛藤しながらも進もうとする人間様は、嫌いじゃない余っ！」

§

さて、数刻後。

とある村へと夜襲をかけようとした白黒獣耳コンビの前に、顔を布で隠した不審者が立っていた。

「余は百鬼あやめではない」

最初から、全部白状した。

「なぞなぞ仮面だ」

ブハツ、と猫っぽい白狐が吹き出した。

16. せめて盗賊団の方が良かったまでである

森の中を駆け抜ける山賊団のボスは、超遠距離からのものとみられる狙撃を防御しながら、足元が雪原と化した森を観察していた。

(やっぱり、軍師君たちを連れてこなくて正解でしたね)

十数回にわたる狙撃を経て、彼女は相手の力量に冷や汗をかいた。

最初の数発は額と心臓、その後は機動力を削るためか膝と足の甲、最後に防御の範囲を確認するために左右の耳と手の指に毛先。

それらを、順番に、的確に……撃ち抜かれた。

幸いだったのは、ボスのスキルは防御等に特化しており、それらの攻撃を全て絡め取ったうえで、右目のパッシブスキルで無力化できたことだろう。

【パッシブスキル：禁価眼】

その能力の一つは『価値のあるものの価値を鑑定したうえで、等価の貨幣に変換し、収納する』ことだとボスは理解していた。

例えば相手が黒金の砲塔を搭載した自動殺人機械であっても、人が搭乘するタイプのスーツ的なロボットであろうとも、ボスにとっては力モに過ぎない。

全て諸共にお金に変換し、【アイテム】に収納できる。

だから、ボスの【禁価眼】にとつて問題だったのは地表から飛び出すシロクマの方だったが、それらは不思議と見えない膜、あるいは壁に遮られて絡みとられ動けなくなる。

(こっちのスキルは……どこかで覚えがあるんだワ)

アクティブスキルについて考えかけたボスだったが、そんな余裕を撃ち抜くように的確な狙撃が続く。

今度は、足で踏もうとした地面を狙撃されたらしく、空中に浮かんだ銃弾がピタリと止まっていた。

(弾幕が薄いぞ！……ってあおる余裕はないんですけどね)

ボスはまだ姿が見えない相手の狙撃を警戒しながら、アクティブスキルを足場にし、あるいは木に巻き付けて移動速度と旋回軌道に変化をつけ始めた。

ここにきて加速したせいか、狙撃がボスをとらえることはなくなつたが、ボスは警戒を緩めない。

なぜなら狙撃地点と予測したあたりに近づいてから、様々な角度から狙撃された挙句、未だ相手の位置すら特定できていないのだから。(でも、時間は十分稼ぎました。そろそろ……)

「きやあ！」

「ちよ、触れちゃダメだって言ったつしよ!？」

ボスのアクティブスキルの恐ろしいところは、特殊な目のスキルを持つていない限りその存在が視認できないことにある。

それゆえにボスは森の中を走り回って方々に罠を張っていたのだ。こちらから接近できないのなら相手を引きずり出せばいい。

やっていることはまるで獲物を待つクモのようであるが。

「かかりましたね！」

声のする方に向かっていくと、長髪の女性が座り込んでいるようだった。どうやら、足にボスのアクティブスキルが絡まったらしい。

「もらった！」

「かかった！」

「……へ!？」

さて、ボスの失敗は相手のスキルの観察を怠ったこと。

より詳しく言えば、派手な見せ球に騙されたことだった。

今回、ボスのアジトを襲ったのは雪花ラミイと獅白ぼたん。

目的は東西の覇権を争う裏組織の統合することで、他のホロライブメンバーの情報を集めて、ローブ男たちに対抗する足掛かりとするとだった。

……ちなみに、ボスも似たような理由で山賊団を率いているのだが、それはさておき。

ボスの罠にかかったふりをしていたラミイは、即座に【雪の令嬢】を用いて船長に向かって氷のツララを伸ばす。

とっさにアクティブスキルでガードしたボスは距離を取りながら、自らの失態を理解した。

ボスの見えざる罠に、雪が降り積もっていたのだ。つまり、視認不

可能な透明な罫の位置が、手に取るようにわかるようになっていた。さらに言えば、表面に雪が付着している状態では、このスキルが持っている拘束能力も弱まる。接着面に水や砂が付くと、粘着テープの接着力が減衰するようなものだ。

「あー、使いたくはなかったんですが」

暗いために、まだ相手がラミイだと気付いていないボスは、【禁価眼】のもう一つの能力を起動する。

「！」

ラミイのツララが複数の銃弾によって打ち砕かれた。

一瞬、ししろんの誤射かと思つたラミイだったが、直ぐにその可能性を否定する。射角的に、明らかに目の前のボスから放たれた攻撃だったからだ。

驚いたのはラミイだけではない。獅白ぼたんはすぐさま直接視認できる距離まで接近し、発見されるリスクを冒してまでも、【禁価眼】の効果を讀み取つた。

【パッシブスキル：禁k……】

(うん？ 讀み取り遅い？)

【パッシブスキル：禁価眼。あらゆる貨幣価値ある物質をお金に変換して【アイテム】に収納するスキル。また、収納した際に得た金額の三倍を消費し、【アイテム】から取り出すことができる。なお、その際の動作や運動は収納した際そのまま行われる。】

(ちよ、私のスキルの天敵なんだけど!?)

それは、受けた物理攻撃をお金をコストとしてそのままストックして、いつでも返せるという凶悪な能力だ。

(これは本気で潰さないと接近したラミイがヤバイ!)

圧倒的な防御力と、それを最大限利用した相手へのカウンター。総合的に見れば、初動を相手に依存するというデメリットこそあるものの、ハマれば沼ることは明らかだ。

焦りから【銃器作成】によって、それなりにダメな兵器を複数生成し、音速でその頭をなでなでしたぼたんは近接装備以外を外すと、ラミイとボスの間に瞬時に移動した。

「え、ラミイじゃん!？」

「その声……マリン先輩!？」

しかし、その時には既に二人はお互いがホロライブメンバーであることに気が付いていた。山賊団のボスこと、宝鐘マリンは自らの顔を隠していたローブを脱ぎ、何処かから取り出したいつもの海賊っぽい帽子をかぶり直した。

「急に襲ってくるから船長、てっきり敵かと勘違いしていました」

「いや、山賊団にまさか先輩がいるなんて思わなくてですね」

「あー、言われてみれば私たちも盗賊団とつるんでるわけだし、想定すべきだったわ」

ししろんは相手が間違はなくホロライブメンバーの先輩であることを認めて、少し肩の力を抜いて様子を観察した。

全体に赤を基調とした服装にやや短めのスカート。なんとなく“船長”と呼びたくなるような覇気を感じる厚手の上着は、ほっそりとした体格にあっておらずややダボついている。先ほどまで金色に輝いていた右目は今は黒の眼帯で隠されており、赤い左の目だけがラミイとぼたんにやややし訳なさそうな様子で細められていた。

「ところで先輩、会いました?」

「……ええ」

単刀直入な質問に、船長は厳しい表情で端的に返した。ラミイだけが、何の話かすぐに分からないのか、頭にはてなマークを浮かべている。

「船長が倒したのは相手の目を見て支配するスキルだったようでした。まあ、この目みたいに特殊な目のスキルを持っていると効かない能力だったみたいですよケド」

「……」

とん、と眼帯を指でたたいて、少しおチャラけた雰囲気で場の空気を明るくしようとする船長の様子を見て、おそらく大丈夫だろうと獅白ぼたんは今までの経緯を知らせた。

「で、ぼたんさんが警戒していることは、こっちも理解してるんだワ」
それは、お互いに自分が支配されていない事を証明できない、とい

う恐ろしい事実だった。宝鐘マリンの出会った相手と雪花ラミイを操り、獅白ぼたんが倒した相手は別だが、同じ支配系統のスキルを持つていた。

とすると、おそらく同じ敵対勢力なのだが、支配系統のスキルが存在するという事は、常に味方が敵に回る可能性があるという事だ。

ぼたんが盗賊団のアジトで寝る時までラミイと一緒にだったのは、自分と別行動しているうちに知らずに支配スキルの影響を受ける可能性を減らすためだ。

…断じて寝顔眺めてにんまりしたり、こつそりほつぺたをツンツンするためではない。

そして、この世界で初めて出会った相手はたとえ同じホロライブメンバーであろうとすぐに信用するわけにはいかない。支配系統のスキルにバリエーションがある以上、支配されているかどうかすぐには分からないものや、最悪、支配されていることに本人が気づけないようなスキルまである可能性もある。

獅白ぼたんはそこまで口には出さなかったが、先輩たる宝鐘マリンがそれに気が付いていないはずがないと、視線を交わす中でそう確信していた。

「ところでマリン先輩、良いニュースと悪いニュースがあるんですけど、どっちから聞きたいですか」

「なあにぼたんたん？ 船長すごく嫌な予感がするんですケド」

情報交換がおおむね完了したところで、話をぶった切るように獅白ぼたんは言った。

ラミイはその時、とんがったエルフ耳をピクリとさせて、何かを察したような表情を浮かべた。どっちかというのと、目のハイライトが消えて無表情に近くなったともいえる、悟りの表情だったが。

「じゃあ…悪い方からお願いします」

「敵だと思ってたんで点火済みです」

その時初めて、マリンはしゅーという、炭酸の抜けるような音が周囲から聞こえることに気が付いた。

良く見渡すと、蛍火のようなものが雪が降り積もった森の中を飛ん

でいた。

いや、それは、点火された導火線の先が燃えているのだ。

「私のスキルで空想兵器を作れるものがあって、SSRB民、自走する爆弾作っちゃいました、テヘツ☆」

「船長つぽく笑ってごまかしたなああああ！」

四つ足で雪原を走る、小型犬程度の丸い爆弾は今にも爆発しそうだった。何故か非常にのんびりとした表情で、「かまへんかまへん、バレへんて」みたいな雰囲気醸し出している。数秒後に爆発四散するの。

「ちなみに、良いニュースは？」

「はい！ 私足速いんで今から走れば間に合います！」

「私のスキルは自分中心に温度と風を操るので自分だけなら身を守れますー！」

「だから私たち後輩のことは心配しなくて大丈夫です！」

「ちくしょう！ たくましいなあ!!」

と言いつつ船長は眼帯を外して【禁価眼】を発動する。

(……ええ！ なんでよ!?)

パッシブスキル【禁価眼】は、無制限に使えるスキルではない。

その制約に“モンスターや生物を換金することはできない” “価値のないものあるいは価値がマイナスなものは換金できない” というものがある。

さて、SSRB民は獅白ぼたんになデナデされた回数や時間によって威力や爆発までの時間が増減する兵器であり、ある種の意思を持っている。それはいわば、マリンに敵対する意思を持つ生物のようなものである。

そして、点火前の爆弾ならともかく、今から●秒後に爆発する爆弾が販売されているのを見たことがあるだろうか。あるいは、販売されていたとして買うだろうか。

答えはNOだ。ゆえに、金銭的価値は無である。

これら二つの制約ゆえに、【禁価眼】はSSRB民に通用しない。(こうなったら、もうアクティブスキルの方でガードするしかないん

ですケド!?)

船長はちよつと涙目になりながら、自身のアクティブスキルで生み出した膜のようなそれを何重にも自分の周りに張り巡らせた。

固定すると航空機の訓練のように、重力の影響を受けてダメージを負いそうだったため、それもせず、自分をマユのように包む鉄壁の防御が完成した。

同時、爆発と閃光が船長を襲う。

「爆発オチなんて最低だああああああああ!!!」

そう叫びながら、船長は夜空に光る一つの星にならんばかりの勢いで、吹っ飛んで行ったという。

17. チュートリアルには遅すぎる

「疲れたのら〜」

「つかれたね」

「しゅばっ！」

三者三様に感想を述べたのは姫森ルーナと天音かなた、そしてスバルドダックとなった大空スバルである。

彼女達はギョリノフの地図を頼りに買い物したり、あるいは宿を探したりしたのだが、この町はなんとというか、ホロライブ味であふれていた。

まず、ファンタジー感あふれる寂れた道具屋に入れば、カウンターの店主から様々な商品を勧められた。

天音かなたの目に留まったのは、一房のバナナだった。大体十本くらいあるうち一本だけが黄色で、他はオレンジ色だった。

そこはかとなく、ココにはいない誰かの髪型に似ていなくもない。

「嬢ちゃん、バナナを見るのは初めてかい？」

と、受け取り方によってはセンチティブな言い回しで、しかしにこやかに話しかけてきたスキンヘッドの店主に、かなたがこれは何かと聞くと、

「この黄色い部分がバナナだ。まず、このバナナをもぐ、するとな」

なんと、残ったオレンジ色のバナナの一つが黄色くなった。

「こんな感じでバナナにして食べるんだ。オレンジ色のやつはまだ熟してないから、気をつけるんだぞ」

「へえ、じゃあさ」

天音かなたは興味本位で親切な店主をこの上なく困らせる質問を放つ。

「オレンジ色の部分はバナナじゃないの？」

突如、スキンヘッドの店主は自らが禿げ上がるまでの人生を走馬灯のように思い出したかのように、白目を剥いてフリーズしてから、こんな言葉を絞り出した。

「……バナナじゃないが、バナナなんだ」

三人が吹き出した瞬間である。
笑った後、ルーナが「虫捕りが甘えのら」とつぶやいてちよつと目のハイライトを消していたのが怖かったという。

§

続いて訪れた鍛冶屋。

この店は武器屋や防具屋、その他装備などを買う施設のようで、奥の部屋からはツチが火の粉を逆巻きながら、金属に打ち付ける甲高い音が聞こえていた。

「……」

寡黙な髭面の店主は、年齢による衰えを感じさせない筋骨隆々とした両腕を組んでカウンターに立っている。

たじろぐルーナ達だったが、カツ、とその目が見開らき、店の奥へと行った後、ルーナに向かって銀色の指輪を差し出した。

「あんたに売れるのはこれだ」

【ペアリング】

「買ったのらー！」

「しゅばばば!?!」

どうやら、レアアイテムを条件次第で売ってくれる店らしく、スバルの悲鳴を無視して、姫様はペアリングを手に入れた。

ちなみに、スバルに装備させたところ、スバルドダック形態では首元にきらりと光っている。

一体どうやって首元まで通したのか。

指輪を見つめてうっとりする姫様と、首輪指輪の冷たさに愕然とするスバルのことを努めて頭の端に追いやって、天音かなだが店主に話しかけたところ、頭の手裏剣じみた天使の輪つかの売値を見定め始めたので、丁重にお断りすることにした。

「あんたの頭の金属、まるで伝説の……」

無愛想な店主の視線を追えば、無骨な鍛冶屋にかえってよく似合ったカタナが壁に勲章のようにかけられていた。

「あれは？」

「一応言つとくが売り物じゃねえぞ？ あれは、劍豪「かたなそ」が使ったと言われる刀だ。俺はあの刃筋を初めてみた時に惚れちまつてな。未だにあの領域の武器が作れるまで精進しようって決めてんだよ」

「クエストの受注条件を満たしました。クエスト：まどろむ劍豪かたなそ、を受注しました」

「かたなそって誰だよ!?!」

「クエスト」受注のアナウンスに突っ込んだかなただったが、鍛冶屋の店主はふっ、とダンディな仕草で息を吐きつつ、肩をすくめた。

「いや、忘れてくれ。まさかな。俺が子供の頃、ひと目見た時は、褐色の肌に美しい金髪をたなびかせた熟練の劍豪だった……その無慈悲で豪快な剣さばきから、裏で表で金獅子と恐れられていた」

「誰がラー○ヤンだよ!?!」

この辺りのやりとりから、ルーナは何かを察したようにニマニマと笑っていた。

§

そして、ギョリノフに勧められた宿屋に着いた瞬間、アヒル形態のスバルの目からハイライトが消えたことに他の二人はすぐ気がついた。

宿屋には看板が掲げられていた。

【あじまる屋】

なんとなく懐かしい音程で「休めーるよ、安い宿だよー」と歌うように客引きする店員。

一階がラーメン屋、二階・三階が宿という未知の構造。

そして、特別な味でも唯一無二の売りがあるわけでもないのに、また食べたくなるお袋の味のような、優しい味のラーメン。

老舗【あじまる屋】が長い歴史を持つわけである。

「「ずずっ」」

三人はキレのある音を響かせてラーメンをすすする。スバル的には悔しいことに美味しかったらしい。……そのくちばしで、どうやって食べたのかは知らないが。

「でもねえ、最近変なことが起こるようになっただよ」

宿屋の店主がそんなふうには噂話をするのをルーナは聞き逃さなかった。

「何があつたなら?」

「なぜかね、三階の一番奥の部屋で、寝ていると変な音が聞こえるのさ。それで上客が泊まるのをやめるっていいだしてさあ」

今までの経験から、「クエスト」が始まると身構えていた三人だったが、一向にそのアナウンスが起きない。

なぜなのか、と不思議に思っている。

【クエスト：二体の妖怪のクエスト受注条件を満たしました。】

遅れて聞こえてくる機械的なアナウンス。

しかし、それには続きがあつた。

【error! 大空スバルを人間にしてください。】

「しゅばしゅばあ! (オメエまで擦ってくんじゃねえよ!!?)」

なんとなくスバルが何を言っているのかわかったのか、ルーナはやはりニマニマと笑っていたという。

§

【クエスト】が発生しているので、折角だからと三階の一番奥の部屋に泊まりたいと伝えると、宿の店主はむしろお願いしたいとばかりに料金をかなり割り引いてくれた。

「いいベッドなのら〜」

といいながら不思議素材でできてるのか、物凄くふかふかのベッドにダイブした姫様に対して、あなたは同期のアイドルとして姫様がご機嫌すぎると気がついたのか、首を傾げながら問いかけた。

「ねえルーナは、この世界のことどころ、何か気づいたの？」

ルーナはニマニマと自信ありげなドヤ顔を浮かべると、この世界がゲームの延長にあることを前提とした自説を披露した。

「この町はおそらく、ルーナとあまねちやとスバルちや先輩が仲間になる町なのら！ だから、色々ルーナたちに絡めたイベントが用意されていると思うのら！」

「それで変なクエスト始まったり、」

「しゅばあ……（ペアリング売りつけられたらするツスね）」

ルーナが全く酷い目に遭っていないことを除けば、概ね納得できる分析に天使とアヒルは顔を見合わせた。

なお、ルーナは明言しなかったが、自分がゲームの主人公で、仲間になるイベントが自分に起きていないと言う可能性もある、と言う仮説も頭の中にあったりする。

「ルーナの言う通りなら、早めに町を出たほうがいいのかな」

「そうとも限らねえのら。ゲームだとイベント消化しないと、強くなれなかったり、特別なアイテムを取り逃がしたりするのら！」

「しゅば！（そもそもアヒルで始まった理由はなんなんスかあ！）」

スバルだけが会話のドツチボールというか、シャドーボクシングを続ける中、その憤慨を感じ取ったかなたは話題を変えた。

「そういえば、ルーナってルーナイトの言いたいことがわかるの？」

「なんていうか、ビビってくるのら」

「それならさ、スバル先輩の言いたいことは読み取れないの？」

「!? なるほど、やってみるのら！」

方や、姫様を見上げてしゅばしゅばと言うスバル。

方や、背の低いスバルのダツクの前で正座するルーナ。

アングルだけは、最愛のジュリエットに愛を捧げるなんかわめいてるロミオだった。

ロマンチックは止まっている。

「なるほどなのら〜」

「しゅばしゅば——（さすがルーナ、わかってくれ——）」

「お風呂に入りたいのら?」

「しゅば?（えっ?）」

「確かに、歩き回って疲れたもんね」

スバルの鳴き声を肯定ととらえたかなたの暢気な声が、どこか空虚に響いていた。

「そうと決まれば脱ぐのらー！」

「!？」

ホロライブサマーってレベルじゃねえぞ。

「脱ぐって、帽子以外全裸じゃない？」

かなたの言葉の追い討ちに愕然とするスバルだったが、先に服に手をかけた姫様が、「んく、うんく、んなつしよーい！」とよく分からないかけ声をあげながら服に手をかけてゼエゼエしているのを見て、異変に気がついた。

服が脱げないのである。

18. そっくりさんが落ちてきた

何かが墜落した。

岩盤にぶつかり、木々を薙ぎ倒し、ようやく止まった彼女は自身の仮面がわりの布や衣服が微塵も傷んでいないことに首を傾げながら、跳び上がるようにして起き上がった。

周囲には人の手が入っていないさそうな鬱蒼とした森が広がっている。

「うーむ、弱った。勝てんかもしれないな」

他でも無い、百鬼あやめである。

「人間様の言っておったスキルとやらは、本当に恐ろしいな」

羅刹と阿修羅、二刀を構えるあやめの目の前には、既に先輩である白上フブキと大神ミオが立ちはだかっていた。

「灼け、阿修羅ー」

短い方の刀から、紅蓮の炎がほとばしる。

あやめの斬撃に合わせて飛んでいったそれは、フブキが持つ刀を一振りすると、何か見えない壁に阻まれるようにして途絶する。

その一秒に満たない瞬きの刹那に、ミオはあやめを間合いに収めていた。

刀の間合いより、遥かに近いインファイトの距離だ。

「くっ!?!」

あやめはとつさに羅刹の柄で拳を叩き落とそうとしたが、それを読んでいたかのようにミオの拳は止まり、回し蹴りが脇腹に刺さる。

寸前、

「奥の手までバレておるのか!?!」

ミオは蹴りが当たる直前に足を止め、バックステップで距離を取る。

その直後、あやめを中心として烈火の如く炎が燃え上がった。

(阿修羅の鬼火は燃やしたいものだけを燃やす。羅刹の能力を思いつきで誤魔化したのもこの能力のお陰なのだが……余の体面を伝って燃やす範囲攻撃すら読まれるとは……少し試してみるか)

あやめは突然、地面に阿修羅を突き立てると、残る羅刹を両手で持ってミオに振り下ろした。

しかし、何かに気づいたミオはあやめの攻撃を最小限の動きでかわすと、即座に左へと位置を移動した。突き立てた阿修羅を中心に円を描くように。

直後、ミオが先ほどまでいた場所に、鬼火が背後から着弾し地面を焼き尽くした。

「未来でも見えとるような避け方だな」

阿修羅を引き抜きながら、あやめは振り向くように刀を薙いだ。

しかし、その一撃によつて放たれた鬼火は、フブキが刀を一振りすると何も存在しなかったかのように消えてしまう。

見えない何かに阻まれて。

(フブキちゃんもミオちゃんも、スキルとやらを使っているようだな。

フブキちゃんのスキルはおそらく、遠距離攻撃に対する防御。攻撃なら余を直接斬ったり、移動を妨害できるはずだ。

ミオちゃんのはよく分らんが、阿修羅の鬼火を余に伝わせて放つ範囲攻撃や、地下を伝わせ背後から放った鬼火すらかわしたことを考えるに、知覚系の能力らしいな)

あやめは自らの闘志が燃え上がるのを感じる。

それは、鬼としての闘争本能。

思考が加速する。

(……阿修羅は当たらず、羅刹は手加減ができぬ)

達人の領域—— 不断の努力、武術の才能、戦場の経験。

それらの積み重ねの果てに到達する極地の視界。

感情を排して冷静な自分と、燃え上がる闘争の激情に身を委ねなくなる誘惑の合間に、あやめは冷静さを取り戻す。

(さて、ならひとまずはどちらの能力も封じ、純粋な闘争をしようぞ?)

阿修羅と羅刹の二刀流には二つ、フブキとミオを倒すために決定的な弱点があった。

一つは威力が強すぎることで、そしてもう一つは射程距離だ。

使い方によっては必殺の威力を発揮する二刀は、相手を撃退するにはオーバースペックであるし、そのために手加減して振えば、ミオに接近されて刀の間合いより内側から殴られる。

ゆえにあやめは二刀のうち短い阿修羅を左手で構え、右手を後ろに引く。

阿修羅で牽制し、打撃で動きを止めるつもりなのだ。

しかし、

(いや、それでも間に合わぬとは、異常だぞ!?)

例えるなら、0.01秒前の大神ミオを斬っているかのように、斬撃が予測をすり抜ける。

それならと、きつさきにくっそり宿した鬼火を撃てば、見てもいないのに避けられる。打った拳が命中する紙一重の距離まで下がって、腕を絡め取られて投げられる。

(弱った。わからぬ)

十数回の攻防を経て、あやめは二人の戦闘能力への評価を上方修正していた。

白上フブキは刀を振ることで、鬼火のような遠距離攻撃を無効化する。しかし、もう一つのスキルは不明。距離をとって様子見をしていくことから、近接戦闘の能力は低いのもかもしれないが、あやめの直感には近づくとも手酷い反撃を受けそうだと警鐘を鳴らしている。

大神ミオは特殊な強さや武器こそ持ち合わせていないが、達人クラスの攻防の冴えと、初見殺しの技を見切る観察眼を持っている。そして、スキルによるものではなさそうなインファイトの技術には目を見張るものがあり、素の身体能力のバランスがとにかく良過ぎる。

(ならばこそ、奇策が生きよう!)

あやめは突然、ミオの目の前で高く宙返りすると、頭を地面に向けながら鬼火を放った。

案の定、後ろへと回避するミオに内心で安堵しつつ、着地点に阿修羅を振り下ろす。

実は鬼火はミオを攻撃するためではなく、跳躍距離をかせぐ推進力を得るために放ったのであり、その方向には白上フブキがいた。

振り下される阿修羅。

応じて返す刃。

——ガキン。

重く高い音が響いた。

「ほほう、ようやく届いたなフブキちゃん」

あやめからすれば、異常なミオの回避の正体がフブキの可能性もあったが、この行動からしてミオ個人のスキルの可能性が高いことがわかる。

慌てて追撃をしようとしたミオは、突如バックステップであやめから距離をとった。

(うむ、なにもしようとしとらんのだが?)

あやめが首を傾げた瞬間、雷が落ちた。

否、そう錯覚する速度で上空から誰かが落ちてきたのだ。

「きゃはっ?」

ほとぼしる雷光の如き金の長髪。

浅黒く引き締まった小柄な肢体。

そして、彼女の雷光のような長髪の前で、やや傾いた正眼に構えられた身の丈ほどの大太刀は、雷の如く輝く金の長髪をすら切り裂くかのような存在感で、冷たく白銀色に輝いていた。

露出の多い衣装はおへそや胸元が露出していて、彼女のスレンダーでありながら一部が隆起したプロポーションを隠すには至らない。

「刃鳴りだ刃鳴りだ刃鳴りの音だ!」

戦火の産声、干戈の残響! 戦意の咆哮、惨禍の足音!

これこそ戦場、そこに我有り!

——剣豪かたなそ、推参!」

黒い翼をはためかせた天使は、軽薄に酷薄に、しかし薄氷の上に無音で舞い降りるような繊細さで、つと小さな足音を立てて——地上に降り立って、嗤^{わら}った。

「かなたちちゃん……じゃない余!?!」

19. テンドンはおいしいって誰かが言ってたにえ

「くっ、しまったペー……」

空中にはりつけにされたウサミミの少女は、眼前のローブ男を見下ろした。

周囲は凄惨な戦闘がくり広げられた跡なのか、地面にはいくつものクレーターができ、火の粉と黒煙が舞っている。

はりつけになった少女はそのウサミミをピコピコさせながら、悔しげに歯を食いしばっていた。

彼女の名前は兎田ぺこら。青白い独特な色彩の長髪を、左右でツインテールの三つ編みにしている。三つ編みには彼女の大好物であるにんじんが突き刺さ——あしらわれており、寒色系のファッションに暖色によるアクセントを加えている。全体にふわふわもこもことした衣装と黒タイツから見て、寒さが苦手なのかも知れない。

普段は好奇心に輝く蜜飴のような色の瞳は、今は目の前の男へ悪意の視線を放っていた。

「油断したな。お前が予想してた通り、確かに俺のスキルには、ヒトに対して一切攻撃能力がない。その代わり、融通が利くのさ」

黄色いローブを着た男がウサミミの少女に手を向けると、彼女を拘束するムチ、あるいはツルのような光り輝くそれは、彼女を無理やり正面に向かせた。

さつきまで宙に浮く光り輝く剣のような形状だったそれは、どうやらローブ男の意志によって形も性質も変幻自在に変えるらしい。

「【赤】の奴ほど好き勝手移動できねえが、戦闘時の速さなら俺が【魔王】の配下でも随一だぜ」

「そんなことはどうでもいいペー……」

兎田ぺこらは好奇心旺盛であるとともに、新しい物事へのアンテナが鋭く、敏感に流行り廃りを感じ取れるタイプである。

それゆえに、今の状況が自分だけのものではなく、ホロライブ全体に与えた、もしくは与えかねない影響について即座に考え至ったのだ。

「このヘンテコな世界に連れてきたのはアンタたちだとして、ペコーらの友達に手を出したらゆるさねえペこよ！」

「知らねえよ。俺はともかく、【赤】や【魔王】は後進育成にご執心でね。文句はあいつらに言え、まあ」

無理やり正面を向かせたペこらに、男は人差し指を突きつけた。

「言えたらだがな」

コキツ、とペこらは自分の首が勝手に曲がる音を聞いた。

そして、手足の力が抜けて、ダラリと水死体のように宙に浮かんでいる。

「支配完了つと。何を全く、【あっち向いてホイ】ってのは、少しばかり条件がキツすぎると思うんだがな。魔王様め」

一人で皮肉げに笑った黄ローブの男は、何を思ったのかペこらの方を向いて続ける。まるで、何かを懐かしんで、誰かの無事を祈るように。

「……すまねえな、嬢ちゃん。俺たちはお前たちとは違う、ヒトデナシだ。そして、【魔王】は……いや、だからこそ、俺たちはこの世界の敵だ」

赤ローブ男と違い、どこか人情味のある黄ローブ男は、

「定められた最悪最低の【魔王】つっーには、あの野郎は弱すぎるんだぜ」

もきゅっ、と足下から変な感触がして、ペこらに向けていた視線を切った。

「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」
「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」
「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」
「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」
「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」
「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」
「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」「もきゅっ」

そして、足下に白い獣毛をまとった丸っこい者たちが無数にうごめいているのを見て、絶望する。

「てめえ、まさかこれを狙って……くっ!?!」

突如地面が発光した。

そう勘違いするような絨毯爆撃に近い連続爆発を身に受けて、黄色いローブの男は撤退を決意する。

自らの体を光の球のようなものに変え、自身が出せる最高速度で、ペこらの攻撃範囲から離脱して逃げていった。

「ふう、なんとかなったペこ」

ペこらはこの世界で得たスキルが想像通りの働きをしたことに安堵する。アクティブスキル【封閃^{ふうせん}】、パッシブスキル【聴き耳】はペこらが使ってみた感触として非常に使い勝手の良いものだった。

アクティブスキル【封閃】は毛玉のような風船を膨らませるスキルのようにであり、小さなものなら手指のすきまから、大きなものは口と手指を結んだ先から生成できる。

威力は大きさに比例するが、ペこらが望む相手以外に影響を与えず、かつ簡単な命令なら群れなす生き物のように長時間操作可能。さらには、大きなものには騎乗して騎馬のように使うこともできる。

ペこらは自身が敗北して意識を失おうとも、これらの性質が変わらない事に賭け、自分が敗北した後に引き分けに持ち込むつもりで仕込みをしておいたのだ。

もつとも、敵が支配スキルなどという想定外のスキルを持っていることは、黄色ローブ男の独白で理解したのだが。

そして、ペこらのパッシブスキル【聴き耳】は【封閃】を媒介に音を拾う探知スキルであり、その探索能力は驚くほど高かった。

「……あいつは少なくとも近くにいないはずペこ」

ふう、と安堵したペこらは力が抜けたのか、未だ炎がくすぶる地面にへたり込んだ。ついで、空気を詰めた【封閃】を生み出して、寝転がる。

見上げた空は青かった。

「これから、どうすればいいペこ？」

【封閃】と【聴き耳】を使って周囲の探索と消火等を行いながら、ペこらは自問自答する。

どうやらここは異世界らしく、ほかのホロライブメンバーもこの事

態に巻き込まれていそうである。

(でも、ペコーらは外に出たくないペコー)

引きこもりの矜持きんじつである。

ダメ人間の論理いりごんともいう。

ペこらは【封閃】を色々試して、ついにぺったんこなマットを生成する事に成功したあたりでゴロゴロした後、ふと、視線を空から地面に移した。

小さな緑色の芋虫が草を食べていた。しかし、その草以外にはペこらが焼き払ってしまったせい、周囲に見当たらない。

なんとなく責任を感じたペこらは【封閃】でそつとすくいあげると、その芋虫を戦闘圏外に飛ばした。

(なるほど、こんな芋虫にさえペコーらが望めばノーダメージになるペこね)

着地した芋虫は少し驚いたように止まった後、ゆっくりと動き出して近くの草を食べていた。

いずれこの芋虫も、サナギを経て蝶になり、この空を飛んでいくのだろうか。

ペこらはそんなことをゆったりと考えながら、現実を受け入れつつ肩を落とした。

こんな小さな虫でも、必死に生きているのだ。

「はあ……仕方ねえペコー！ とにかくまずは町でも探すペコー！」

索敵能力において、ペこらの【封閃】と【聴き耳】は非常に優秀だ。

【封閃】で作った毛玉に乗って本体のペこらは高速で移動しながら、周囲にばら撒いた毛玉から情報を収集し、場合によっては爆破して敵を倒せる。

さらにペこらは先程マットにした毛玉の応用でマントを作り、周囲の風景に溶け込む迷彩を施しつつ、防御力を底上げた。

「ふあっふあっふあっふあっ！ これで無敵ペコー！」

調子に乗ってるペこらはさっておき、彼女の【聴き耳】が不穏な音をとらえた。

どうやら、これだけの手勢を無視して、さらには隠れているペこら

に一直線に向かってくる何かがいるようなのだ。

ペこらは周囲に【封閃】による伏兵をばら撒いて、【聴き耳】による情報収集を続けた。

(足音はきつっきの黄色いやつより軽いペこ？ あと、なぜか迷わずペこーらの方に真っ直ぐ走ってきてきてるペこ?)

正体不明の相手に警戒を高めるペこらだったが、その姿が見えてからは杞憂民を笑えないなど、思わず嫌な笑みを浮かべた。

白と赤を基調とした巫女めいた和装は、彼女に神秘性を持たせるにはやや心もとない。なにせ、表情豊かで天真爛漫な彼女は好き勝手動くし、お年玉をカツアゲするし、なんならたまに無駄な奇跡を起こす。

ピンク色の長髪の頂点でアホ毛がひよこひよここと主張しており、黄色の瞳は今は目的の兎田ペこらを見つけた事で嬉しげに輝いていた。

彼女の名前はさくらみこ。

「何言ってるかわからんけどとりあえず可愛いからいいか」と海外ファンの支持も厚く、ユニークな滑舌のせいで動画の字幕が意味不明の言語で表示されたりするだけの、多分正統派なミコさんである。

彼女の自室の加湿器は、「水入れなくても加湿できるはずだにえー」と無理難題を押し付けられたりしていた。

機械に奇跡を要求しないで欲しいものである。

「うわああん！ うさだああああ!!」

「あつー！ ばかー！」

「にえつ?」

ところで、ペこらの【封閃】がばら撒かれた場所を真っ直ぐ走破するとどうなるだろうか。

先に見た通り、ペこらのスキルは本人の意思決定から切り離され、オートで簡単な命令をこなす。

ペこらが望んだ相手にのみ影響を与える効果は、味方へのフレンドリーファイアを防ぐための安全プログラムでもあったのであるが、ソロだと思っていた彼女は、その辺りを設定していなかった。

「えつ、うさだこれなんだにえ?!」

それはまるで、クツツキムシと呼ばれる実をつける雑草の繁茂する原っぱに突っ込んだよう。

「な、なんだろうーなあ。ペコーらよくわからないペこなあ」

「嘘つくんじゃないやねーよ！ 目を合わせー」

ちゅどーん。

「にええええええ!!?」

開幕即死攻撃を喰らった巫女さんは、あっちゅあっちゅと叫びながら、どこぞの山賊もとい船長と同じようにお空へ飛んで行ったという。

20. 天雷、雷音、彼方より

「天音どなただよっ!？」

雷のように空から落ちてきた少女、自称「剣豪かたなそ」に思わず突っ込んだ百鬼あやめだったが、その答えが返る前にその手に光る刀が一閃された。

「お、やるじゃん」

「ちよ、いきなり何を——!？」

数回、刀同士が打ち合う金属音がした。

しかし、その速さゆえに常人には一つの音に聞こえたことだろう。その太刀筋の正確さ、体の急所と攻防の合間を縫うような剣戟は、あやめが舌を巻くほどだ。

しかし、かたなそはなぜかあやめをまじまじと見て、しょんぼりと肩を落とすと、その刀を鞘に納めた。

よもや、実力に不満を抱いたのかと闘争心と対抗心をかき乱されるあやめだったが、

「ふわあ、せっかく見つけたボクの斬撃を全部受け流せる達人なのに、愛刀持ちかあ……」

「??？」

「その柄巻の手擦れやら何やらを見れば分かるよ。君、その二刀相当使い込んでるよね」

「そうだが、お互い様だろうに」

「はあつ、やっぱりかあ」

よくわからないことを言っとうなだれるかたなそ。

声は天音かなたによく似ているが少しハスキーで、よく見れば金髪に褐色の肌だけでなく、その翼は烏の濡羽のように艶やかに黒々と、しとやかに光っていた。

(やっぱり、かなたちゃんじゃないぞ)

あやめは主にかたなそのお腹より上、首より下の部分を最後に観察してそう結論づけた。

一体何があるというのか。あるいは、オリジナルは何も^{きよ}ないともい^む

う。

「でも、すごいよ君！ ボクの斬撃を全部受け流して平然としてるし！ しかも本来は二刀流なんですよ!」

「ん？ ああ、そうだがお主は誰なのだ？」

戦意を感じないかたなそに毒気を抜かれたあやめの口から、素直な疑問が飛び出す。

「剣豪かたなそって知らない？ 結構有名なんだけどなあ」

「すまないが知らぬな。余はこの辺りに来たばかりなんだ。しかし、お主は私の友人によく似ている」

「えっ！ それってボクみたいに強いって事!？」

百鬼あやめは少し考える。

天音かたなは確かに強い。主に握力が。

その握力の強さは一流のアスリートにすら引けを取らず、一部にゴリラなどと呼ばれるものの、体軀はあやめ同様小柄な方で、

また、刀を握り振るうことを考えると、握力が強いということは意外に重要な要素である。

「強いどころか手の力（握力）だけなら、余より遥かに強いぞ。強すぎて、ゴリラなどと不届きなことを言う者がいるほどだ」

「きやはっ?? 世界は案外広いなあ。今日だけで二人もお気に入りを見つげるなんてね。ところで、」

一瞬にして二閃。

かたなそは会話のスキを見て近づいてきた大神ミオと白上フブキをその大太刀の峰打ちにて下がらせた。

（やはり、余に攻撃した時もじゃれついた程度か。本気を出し合えば分からぬが、刀の速度だけなら二刀流では負けるやもしれんな）

試してみたい気持ちはあれど、実行すればそれはすなわち、試合にあらざる〇し合いである。

「うー、ボクこの二人嫌いー!」

当のかたなそはそんな雰囲気は微塵も感じさせずに、白黒獣耳コンピを嫌そうにジト目でにらんでいた。

「そう邪険にしないで欲しいな。あのお二人は余の友人なんだぞ」

「あ、ごめん。君……えーっと」

「なぞなぞ仮面……などと言つとる場合ではないな。百鬼あやめだ余！」

「ボクはかたなそって呼ばれてるけど、なんか気が抜けるからカタナって呼んで欲しいな」

かたなそ改めカタナは、好敵手と認めたのかあやめにそう名乗ると、すぐさま視線に怒りを乗せる。

「戦場に出る誠意がない。というか、雑魚が遊んでんじゃねーよ!!」

再び抜刀したカタナの剣戟は怒りを乗せてなお正確無比。

それでいて急所を外しながら峰打ちと牽制攻撃を織り交ぜる。

「戦う意志が、戦禍に戦華を添える。君たち誰に操られてるの!？」

ほんの少しの交戦で、どうやらカタナは二人の攻撃に意志の重さがないことを看破したらしい。

しかし、彼女一人で退けられる程、白黒獣耳コンビは甘くない。

あやめより速度があるものの、大太刀一刀による攻撃は見切りやすいのか、ミオは的確に間合いを外し、時折ふぶきが援護するように割って入る。

(なるほど、最高速で突っ込んで斬り合ったのち、遠心力を利用して手足で攻撃しつつ、勢いを殺さず離脱する。技のモーシヨンが大きい割に、空も飛べるせいで相手には反撃のスキが無く、何より常にトップスピードで駆け回る)

その姿はさながら、地面と並行に落ちる雷だ。

数度の切り結びを静観したあやめは、カタナの力量を把握した。

これなら、あるいは。

「うー、もう！ 意志のない攻撃って気持ち悪い！」

「なあ、ここはカタナちゃん？」

「うん、仕方なさそう」

二刀流を使いこなす鬼には一撃必殺の威力があり、大太刀を振るう黒翼の天使には雷光の如き速度がある。

「ひとまず、」

「共闘だ。きやはっ?？」

21. 可愛いアヒルの娘

服が脱げないことに気がついた天音かなた、姫森ルーナ、大空スバルの三人は何故なのかと首を傾げる。

言われてみれば、名前の通りの大空をあれだけ飛んでいて帽子が脱げなかったスバルも異常だったし、残りの二人も服を脱ぐ機会などなかった。

「はっ、まさかルーナに「臭えのらー！」って言わせるために……!？」

「んな馬鹿な！」

「しゅばー！」

ああでもない、こうでもないで三人で話し合っていたところで、突如として大空スバルはある共通点に気がついた。

(そういえば、かなたもルーナも初期衣装というか、姫森ルーナ、天音かなたって言われたら一番に想像する服装ツス)

そして、先のクエスト発生時の、

【error! 大空スバルを人間にしてください。】

というアナウンスを思い出した事がトリガーとなって、何かがスバルの中でカチリとはまった。

まるで雲を突き抜けてその上へと飛び立つように、視界が開けていくのが分かる。

(まさか、海外ニキに認知されたせいで大空スバルより、スバルドダツクが多くの人に知られて、有名になったとして……)

服が脱げない理由、自分がアヒルになっている理由。

そして、人間にしてください、というさも本人の意思によって変えられるかのようなー【設定】的なシステム音声により、大空スバルは理解したのだ。

(メニュー画面さん! アウトフィット 服装選択したいツス!)

【ツ!? 使用条件を満たしました。メニュー画面に【アウトフィット】を追加します】

(きちやあーーー!!)

隠し機能を強引にこじ開けたアヒルは、その本来の姿を取り戻す。

アヒルの時と同じやや大ぶりの帽子を被った黒髪短髪の小柄な少女。

青、赤、黄緑と言った鮮やかな色を織り交ぜた服装は、利発かつ活発に走り回る姿が目には浮かぶようだ。その瞳はカラフルな服装を反射して、水色に近い瞳に僅かなグラデーションを与えていた。

「おっしやあー！ 強靱！ 無敵！ 大空すばーう！」
自重しろ。

そう言いたくなるくらいポジティブで、太陽のように明るい彼女こそ、大空スバルである。

「スバル先輩!？」

「しゅばが人間になったのら！」

「こちらら元から人間じゃー！ー！」

「天使です」

「姫様なのら」

「オチを求めんじゃねー！ー！」

これこそスバルだ、となぜか嬉しくなる二人。

あとかなたはこっそり、ツツコミ役が来たからボケに回って大丈夫だと胸^{かぶ}をなでおろした。

そんな風に、スバルの負担が目に見えないところで増えていたことはさておき、人間に戻ったスバルは他の二人と同じようにメニュー画面を開いて首を傾げる。

本来、「スキル」「アイテム」「仲間」「クエスト」「アウトフィット」と表示されるはずのメニュー画面が、「しゅばっ！」「しゅばあ」「しゅしゅば」「しゅばる」「しゅばしゅば」「しゅばあ」と謎の選択肢に変化していた。

(まさか……最初アヒルだったせいでアヒル語で書かれてるんじゃないかねーだろーな!?)

どうやら、お察しの通りである。

推測を重ねればメニューの機能は使えなくはないが、スキルは全くの不明であった。

【しゅばー！】

【しゅばー】

・【しゅーばー】

・【しゅばるるる】

なんか楽しそうな言語だなあ、とスバルは現実逃避した。

「0と1だけのプログラムほどじゃねえけど、なんとも言えねえ言語なのらね」

「そもそも、鳴き声というかなんと言うか……」

「ちよ、こんなスバルを見るなツス!!」

横からスバルのメニュー画面をのぞき込んでいた二人のうちルーナは、試しにルーナイトを喚んでみることにした。

「うーん、さすがに鳥言語わかるルーナイトいなさそうなのらあ」

「逆にいたら怖えよ!!」

いつもの召喚に応じたルーナイトだったが、そのルーナイトは一切の武装をしていなかった。

すらりとした体躯と燕尾服のシルエットは、まるでどこかの物語から出てきた執事さんのようだ。

「ううん、無理に喚んですまねえのら」

申し訳なさそうにそう言ったルーナにペコリと美しい礼をするや、ルーナイトはどこからか、控えめなデザインだが明らかに高価なティーセットを取り出して手招きした。

慣れた様子のルーナ、仕方なく続くかなた、最後に何が起きたのか理解していないスバルが席につく。

「あ、ありがとうツス」

音もなく椅子をひいてくれたルーナイトに礼を言うスバルだったが、なんとなくオチを察してちよつと涙目だった。

ルーナイトが手慣れた手つきで紅茶を入れ、一番初めにそれを口にしたルーナが一言。

「いい感じにお茶をにごせたのらー!」

「てめえの執事腕良すぎてむしろ透き通つとるわ!!」

2.2. わかった（わかってない）

「酷い目にあつたにえ！」

プンスカと怒っているピンク髪の巫女さん、さくらみこは台風中継のアナウンサーが持つてるビニール傘のように、主に上方向に目を泳がせるウサミミ少女、兎田ぺこらに近づきながら「みこ怒ってんにえ！」と全身で訴えていた。

「だからごめんって言ってるぺこー！」

一方、初めは謝っていたぺこらも、みこの機嫌がなかなか直らないせいか逆ギレモードに突入していた。

「ぺこーらの【封閃】は一部オートで動くスキルだから、悪気はなかったぺこよー！」

「ほんとにえ？」

ジト目で疑うみこは、突然ふふんと不敵に笑うと、すぐにビツクリするように二、三度瞬きをした。表情の変化速度が早すぎる。

「……ほんとだにえ」

「なに自己完結してるぺこ？」

ぺこらがよく見ると普段黄緑色に近いみこの瞳が少し光を放っているのが分かった。

「みこ、こつちにきてなんか色々見えるようになったにえ。パツシブスキル【てんちゅがん】って言うらしいにえ」

なお、正確には【天智眼】である。

そんな天誅^{てんちゆ!}という名の逆恨みで反撃しそうなスキルでは無い。

「ぺこーら達一体どこにきたぺこよ？」

「にえ？ 不思議」

「そっだよねー」と首をかしげるみこと、にえの汎用性に首をかしげるぺこらだったが、お互いの近況を報告し合いながら他のホロライブメンバーを探そうと未知の大地を歩き出した。

正確には歩いているのは背の低い馬ぐらいの大ききの【封閃】なのだが、みこは初めて乗る生き物に最初は内心びびっていたものの、今ではすごくはしゃいでいる。

「うさだー！ これすごいにえー！」

さつきまでご機嫌ナナメだったのが嘘のようである。

ペこらもペこらで楽しそうなみこを見て笑みを抑えきれずにいる。なんだかんだ似たもの同士というか、単純なのである。

「みこ先輩のスキルもすごいペこ」

ペこらが言うように、「パッシブスキル・天智眼」はバグった性能を持っているのだが、二人（主に持ち主）はその事実を正しく認識していない。

「ペこーらの【封閃】が、まさか相手の攻撃も封じ込めて投げ返せるなんて思わなかったペこ！」

この世界のアイテムやスキルのシステムは不親切で、名前くらいしかメニュー画面は表示してくれない。それ以上を知るには、修練と試行錯誤の繰り返しを繰り返すか、目に関するパッシブスキルが必要だ。

獅白ボタンが使い勝手悪そうにしている、スキルやアイテムの効果を見抜く【明鏡止水の瞳】、宝鐘マリンが持つアイテムの価値を見抜き価値に応じて出し入れする【禁価眼】。

そしてさくらみこの目に宿る圧倒的なバグスキル【天智眼】。

無論、これ以外にも大神ミオの持つパッシブスキルのように、目から見た視界に何らかの効果を与与するように見えるスキルはあれど、この世界で生まれた【魔眼】とでも呼ぶべきスキルはこの三つだけだ。事実、みこは情報が多すぎて兎田ペこらへスキルの使い方だけを簡明に教えたが、彼女の【天智眼】にはこんな風に【封閃】が見えていた。

【アクティブスキル：封閃。……アクセス……許可します……封閃は自身の肉体で作った隙間に何かを押し込めるスキルです。

相手の攻撃を包み取って無効化して返すカウンターは非常に燃費が良く、受けた攻撃属性によって自身の眷属【地を這う者ども】【陽を翳す者ども】【津に潜む者ども】などを使役可能です。【者ども】の固有能力は別表を参照してください。

使役された【者ども】は全て自爆スキルを持ち、攻撃を受けた時点

で保有するエネルギーを任意の対象に放出します。

このスキルはかつて【魔人：袋爪^{フクロウ}】がこの世界で顕現させたスキルであり、その真名は袋爪と書いて「フクロ・クロウ」の略であり、かつ封閃の効果を「ふくろづめ」と評したダブルミーニングと思われるます。

なお、【天智眼】を顕現させた【魔人：見々^{ミミズク}尽】とは旧知の仲間でありー】

と、明らかに重要な情報が飛び交っていたが、みこちなので深く考えていなかった。とりあえず話が長いので無視する自前のスキル「わかった！（わかってない）」を発動している。

なお、可愛い以外デメリットしかないスキルである。

可愛いからいいけど。

23. 黒いなあ……

金髪の天使と銀髪の鬼の刀が目にも止まらぬ速さと言うか、空中で千切りや微塵切りが出来そうな速度で振り下ろされる。

しかし、白黒獣耳コンビの反応速度と対応能力は異常で、互角に近い戦いが続いていた。

「きゃはっ?? やるねえ!」

「楽しんでる場合じゃないぞ!」

「うう、でも白い方は愛刀持ちだよチクショウ……」

「悲しんどる場合でもないんだぞ!」

「黒い子は殴るタイプかあ」

「DVの告発みたいに言わんでくれ余!」

テンションの躁鬱^{アゲサゲ}が激しいカタナに突っ込む余裕を見せるあやめだったが、実際はそれほど余裕があるわけではない。むしろ相方が落ちるとあやめも詰むために、必死で声をかけているのである。

(さすがはゲーマーズの二人。阿吽の呼吸だな)

と、納得しかけたあやめはわずかな違和感に気がつく。

(いや、そもそもフブキちゃんの立ち回り方は一体……)

そう、これまでミオの未来を見ているかのような動きに気を取られ、フブキの異常な立ち回りに今まで気がつかなかったのだ。

ミオが攻撃しようとするとなぜか間にフブキがいる。

あやめを追撃しようとしたタイミングでフブキが大振りの一撃を割り込んで回避される。

下がるミオをカバーしようとして時折つまづいて「にやあっ?!」と鳴きながらこける。

(そうだ、逆なんだミオちゃんの思惑と……!?)

ほんの一瞬だけ、支配された白上フブキの動作を邪魔するナニカがいる。

そのナニカは必死で支配されたフブキの行動を止めようとしている。

(そもそも、余を支配した人間様たちは……)

それぞれ、他者を支配するスキルを持っていて。

〔名前〕？)

フブキを縛るソレ。

「まさか、黒上フブキちゃん？」

ソレが名前で縛るなら。

ナニカはその名を覆す事で顕現する。

白上フブキの雪のような白髪が、まるで月蝕のように端から黒く染まっていく。しかし、それは不気味ではなく、不思議と光と影のようなープラスとマイナスではないーただの“変質”であると理解できた。

白と青を基調にした和装は少しはだけて、黒と赤に塗りつぶされ、鋭い眼光は赫赫とまばゆくー深紅に鮮やかに輝いている。

「ああん？ どうやら、ようやく外に出れたらしいなあ、おい？」

ミオと同じ黒髪ながら、真っ直ぐで烏の濡れた羽のようなー黒真珠のように深い黒みは彼女の清楚さより、かえって奔放な気質を表すように風にたなびいていた。

手に持つ刀のこしらえや装飾も白黒が反転したようになっていて、そもそも刀身が真っ黒だ。

「おい、あやめ！ 長くは持たねえ！ ミオを止めんぞ！」

「！ わかったぞ！」

突然の変貌に警戒しているカタナを置いて、あやめはミオに肉薄するや、持てる全力で刀を振り下ろした。

本来、横に斬り払った方が攻撃範囲が広いのだが、振り下ろした方が重く、速い。

「ぎゃはっ?? なんだかわからないけど協力するね」

あやめの振り下ろしのさらに上から、跳躍力と飛翔力を合わせて跳んだカタナが、落雷のように真下に白銀の刀身を薙ぎ払う。

ここまでなら、ミオは回避できたのだが、

「悪いな、ミオ」

その背後から、upside down白黒を反転させたキツネは、容赦なくその刀の柄頭で脳天をぶん殴った。

「うう、地味に痛いヤツだ……」

「鍛錬の時にパパ百鬼にやられた余……」

何らかのトラウマを刺激された金髪と銀髪は割とガクブルしながら黒上フブキを心の中でクロ様と呼んだそうなの。

なお、ミオは完全に気を失ってちよつと泡を吹いて痙攣してるような気がするが、ホログラム時空ならすぐ回復するはずなのであやめは何も見なかったことにした。

「おい、あやめ」

何かを続けようとした黒上だったが、限界が来たのか苦しみ始めた。少しずつ、彼女の黒髪が白く染まっていく。

「チツ……白いのを、頼んだぞ」

それだけ言うと拳を握り、

「寝てろ！」

自分の顔を思い切り殴りつけてセルフログアウトおっこんした。

ちなみに、のちに判明した事だが、ちゃんと白いのになった瞬間を狙ったようで、痛みを感じたのは白いのだったと言う。

「ふ、ふくく、白いの？ お前の額、なんだか『赤いなあ』」

「む、このタンコブはクロちゃんのせいなんですけどっ!？」

24. ルーナイトと眠れない夜（濁点マシマシ）

「すう、すう」

「んな……んなあ……」

「寝てる時も……語尾が……特徴的……ツス……」

スバルのツツコミも鈍る丑三つ時。

ぐっすりと寝ているあなた、ルーナ、スバルの三人のベッド傍、腕を組んだルーナイトが鎮座していた。

「……」

なぜかルーナだけが意を汲んだり会話が成立するルーナイトであつたが、時折、寝返りをして布団からはだけける手足を目にしながらか、やれやれと言つた雰囲気です。布団をかけ直す様子を見るに、ヤンチャな妹や姪っ子の面倒を見るような心持ちらしかつた。

きれいな満月が登る満天の星空から降る光は、古ぼけた雨戸のせいで見えないし、時折、階下から聞こえる酔っぱらいの喧騒は、敬愛する姫様とその友人の耳に届きそうにない程遠い。

「……」

ルーナイトはチラリと、「姫様」とその肩書きを呼ぶことすらはばかれる、自身の主君の寝顔を拝する幸せを噛み締めながら、腰に帯びた剣の柄をなでる。

それは彼の誇りだ。

この世界に初めて姫様に喚ばれたルーナイト。

それまで、彼は自身の価値を見出せずにいた。

彼は自身を無価値だと思つていた。有象無象だと思つていた。

だから姫様にルーナイトとして喚ばれた時、ここを死地としようとした。

しかし、強敵を前に命を賭した自分を、姫様は喜ばなかつた。

「逃げていいのら」

そのルーナイトに与えられた答えは簡潔にして鮮明、

「死ぬんじゃねえのら」

そして、残酷なまでに彼の事を思い、信じた言葉だつた。

「……」

ゆえに、「寝てる間に何かあったら怖いからとりあえず見張つて」という雑なオーダーであれど、ルーナイトは喜んで拝命する。

なお、姫様を含め他の女性陣についてもルーナイトの鉄の掟を準用し、全く毛先ひとつすら触れないよう最大限の配慮をしている。あくまで彼はルーナイトであり、他のルーナイトに抜け駆けするような行為は厳に禁じているのだ。

役得として寝顔を拝見している状態だが、ルーナイトの警護により安心して寝てもらえていると思えば、ルーナイト冥利に尽きるというもの。

彼のやる気と忠誠心は、ルーナの預かり知らぬところで上昇し続けていた。

「大空スバルが人間状態である事を確認しました。クエスト：二体の妖怪のクエスト受注後に発生条件を満たしました。クエストを開始します」

人間状態つて状態異常じゃねえんだよ、とスバルが起きていればツツコミそうなアナウンスと同時に、ルーナイトは立ち上がる。

一瞬だけ、姫様と二人のご友人を起こそうかと迷うが、そのあまりに幸せそうな寝顔に負け、状況確認を優先することにした。

鞘から剣を抜く音が、やけに大きく響いた。

いや、外の音が全く聞こえないにも関わらず、部屋の中の音が妙に大きく聞こえるのである。

まるでそう、耳元でささやかれているかのような……。

ルーナイトが警戒を深める中、部屋の何処かから不気味な音が響き始める。

まるで下水溝の詰まったような不可解な音である。

「……」

何かを察したルーナイトは少し警戒を緩めつつ、さつきまでアヒルだった少女をチラリと見てから、不気味な、それはもう不気味な笛の音が近づいて来ているのを感じ取っていた。

下手くそなりコーダーのようにも聞こえるソレは、目をつむりなが

ら聞くとなんとも言えない不安感をもたらし、中途半端な不協和音と絶妙に不安定な旋律が、不眠を誘発する。

さらに、不気味な音は鳴り止まず時折、

「ジャズ＝ネーヤ」

と、謎の名前を叫ぶのも、独創的すぎてもはや理解できない領域である。

多分、おそらく、これは大空スバルのASMR（快適とは言っていない）をリスペクトしたイベントだ。

ルーナイトは目をつむったまま、なんとなくの距離感で剣を振るって何かを切り落とした。

多分、スバー姫様のご友人のお戯れになられた分身なのだろうと無理やり納得して。

その後、続いて【妖怪アロエ洗い】が出没したりして、ルーナイトが今度は天使の方の姫様の友人を二度見したりしたが、それはおいておいて。

ルーナたち三人は今夜も、ぐつすりと眠っていたという。

§

その日の朝。

「あんたたちありがとうねえ」

寝起きで状況が把握できないかなた達に、宿屋の店主さんはすごく感謝していた。

どうやら夜中にルーナイトが【妖怪エーエズエムアアアル】と【妖怪アロエ洗い】を倒した事がクエスト達成条件だったらしい。

宿屋の店主は店の奥に姿を消すと、なんだか非常に見覚えのあるものをかなたたちに手渡してくれた。

「これ、なんだか高価な道具だって旅の魔法使いが宿代替わりに置いてったものなんだけどね、お礼にあんたたちにあげるよ」

それは、片方が大きな砂時計のような形状で、中は空洞。外側はカラフルに彩色されていて、多分スバルが使うとよく似合う。

「かあちゃんを作ってくれたメガホンにそっくりだあ!!」

スバルは喜んで受け取ると、早速首から下げる。

むしろ体の一部みたいになじんだソレに、本人も満足げに頷いていた。

「あんたたち、人探ししてるのなら王都アマティアスを目指したらどうだい？」

首を傾げる三人だったが、おせっかい焼きなのか宿屋の店主はそのまま王都への行き方や道中気をつけるべき盗賊団が出没する噂等、詳しく教えてくれた。

「最近、盗賊団と山賊団の抗争が激しくなってるねえ、気をつけるんだよ?」

「大丈夫だよ、でも僕達を心配してくれてありがとう!」

「でもこんな親切な人達を困らせるなんて、ひでえ奴らなのら!」

「スバルもそう思うツス!」

……だつてさ、ししろん?

「ありがとう。でも、自警団の若い衆も、村々の間で思うところはあ
るが飲み込んで、互いに協力し始めてるらしいから、簡単にはやられな
いさー!」

そう、快活に笑う宿屋の店主の見送りを受けて、三人は一路、王都
アマティアスを目指すことにした。

25. 四天王だが四人いるとは言っていない

「ふむ、戻ったか【黄】」

「【赤】かよ。【青】のやつはどうしたんだ？」

「さつき戻った。そういうお前は随分やられたようだが？」

「はっ、そっちこそ後進育成に御執心なようで？」

「そういう契約だからな」

その場に居合わせたものがいればーそれこそあやめ達を操っているローブ男達がいれば背筋が凍るところか、凍って碎け散りそうな重圧をかけ合いながら、赤ローブの男と黄色ローブの男が煽りあった。

もつとも、二人にとってそれはあいさつに等しいし、険悪な間柄でもない。

「今回喚ばれた奴らはそれほどに強いのか？」

「いや」

否定の言葉に首を傾げる赤ローブ男だったが、懐かしい名前とスキル名を聞いて、その感情の機微を理解した。

「使ってきたスキルが【袋爪フックロウ】の【封閃】だったもんで、ちよつと気が逸れたのさ」

「……そうか」

コツコツと二人の靴音が響く静謐せいひつな柱廊は幅広く、左右には両腕を広げても抱えきれない太さの柱が等間隔に並び立つ。それらに支えられたアーチ状の天井は緩やかなカーブを描いていた。

しかし、白亜の石材で作られたそれらを観察した者や知識あるものは度肝を抜かれるだろう。

なにせ、それらには一切の継ぎ目がなく、一個の途方もない巨岩をくり抜いて作られたものだと理解できてしまうから。

「ずいぶん遅かったじゃねえか（何かあったのかって心配したよお）」

と、柱廊の半ばで青いローブをまとった男が現れ、非常に大きなキンキン声でそう叫ぶように言った。

「どこかでくたばっちまったのかと思っただぜ（無事で良かったよお）」

偽悪的なセリフの割に、副音声で内心が漏れ聞こえるほどに赤黄ローブ男二人は、この青ローブと付き合いが長すぎた。

「魔王」を待たせるんじゃないかねえ、早く行くぞ（魔王ちゃんも心配してるはずだから、早く行って安心させてあげなきゃー）」

ぶつきらぼうに言い置くや、青ローブ男はズンズンと先に進んでいく。

赤黄ローブ男は顔を見合わせて肩をすくめると、足早に歩を進めた。

同じ景色が繰り返される柱廊を抜けると、開け放たれた扉の先に大きく開けた空間があった。

その奥には、三人の男達にとっては見慣れた玉座があった。

玉座に座するは長身の女性。

白銀の長髪に切長の眼差しはやや鋭く、肌は目が覚めるように底抜けに白い。アメジストを思わせる紫色の瞳は、今は3人の男達を冷たく見下ろしていた。

「魔王」、そろつたぞ?。」

代表して赤ローブ男が奏上ほうじくすると、「はあくつ」と悩ましげに「魔王」はため息をついた。

「一体なぜ?。」

部下に問いかけているようでも、あるいはパズルでも解いているようでもある伽藍堂な声音は、冷たい石材でできた彼女の部屋の中に小さくも、響き渡った。

「お前達魔王四天王は三人しかいないのだ?。」

しかし、続く問いかけに答える声は意外にも否定的かつ騒がしかった。

「またその話かよ。つーかてめえがんなこと言い出すから、【赤】の奴がポンコツ教育に苦労してんだろーが」

「待て、今あいつらをポンコツと言ったか? 訂正しろ」

「あん?。」

急に配下をかばうのかと黄ローブ男が怪訝な声を上げたが、

「あいつらはポンコツどころかかなりのクズだ。一緒にされたポンコ

ツに謝れ」

「どこの誰を擁護してるんですかねえ！」

論点がずれていた。

「はっ、ケンカなら受けて立つぜ（仲裁しなきゃ）」

【青】は黙っておけ。……とところで、そもそも信号機のように赤青黄と名乗っている俺たちに4人目が加わった場合、一体何色になるんだ……!？」

「ペーペーの青二才なんざ無色でいいだろお（みんなちゃんと働く前は無職だよね）」

「大喜利始めんじやねえよ自由か！」

意外と仲良く口論を続ける三人だったが、続く言葉は予想を裏切るものだった。

「試験的に数人【支配】しておいた」

コツコツと複数の足音が三人の男達の背後、柱廊から聞こえてぴたりと立ち止まる。

【青】よ、彼女達を任せる。好きに使え。【赤】は引き続き奴らの育成を続ける。【黄】は情報収集しながら……ホロライブメンバーといったか？ 彼女達の情報収集と偵察を一任する」

「わかったぜ！ 任せな（ふええ、初対面の相手は緊張するよお）」
「承った」

「はいよー。ま、頑張らせてもらおうわ……それより、【魔王】よお？」

黄ローブ男は自身の手元で光を押し固めた針のようなものを生成するや、玉座の足元に向けて放った。

「分かっている。ネズミが入り込んだらしいな」